「宇宙哲学とUFO」改題

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFOと宇宙哲学の専門誌

SPRING
1984

84

月の引力は1/6ではない!

私のUFO目撃とGAP活動

スペース・ブラザーズは注目している

UFO問題とサイレンス・グループ

奇跡を起こす驚異のイメージ法

UFO contactee　第84号目次

〈巻頭言〉予　言 ―― 1
月の引力は1/6ではない！ ―― ウィリアム. L. ブライアン 2
私のUFO目撃とGAP活動 ―― 石川公一 12
スペース・ブラザーズは注目している ―― 伊藤達夫 16
〈写真〉イスラエルのUFO？ ―― 20
絞首刑から生還した男 ―― 久保田八郎 21
UFO問題とサイレンス・グループ ―― イブ・ラウルント 22
〈写真〉ピラミッド上空のUFO ―― 25
奇跡を起こす驚異のイメージ法 ―― 久保田八郎 26
イスラエルの旅の思い出(2) ―― 参加者有志 30
日本GAP海外研修旅行 ―― 33
83年度日本GAP総会 ―― 34
〈読者の声〉コズミック・ポスト ―― 36
〈報告〉福岡支部大会 ―― 37
〈予告〉59年度地方支部大会 ―― 38
〈広告〉アダムスキー全集／84年度第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」 39
日本GAP全国月例研究会案内 ―― 40

GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙イラストは日本GAP札幌支部会員・勝又英嗣氏画

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

あてにならぬ予言類が横行している。昨年も富士山大爆発を予言した本が〝爆発〟的に売れたそうだが、本物のお山は静まり返って今なお白銀の美しい雄姿を見せている。この本のために観光客を奪われた地元の町では著者にたいする告訴騒ぎが起こったと新聞に出ていた。著者がもと気象庁の職員とかで、科学的な信憑性があると大衆は思ったのだろう。

昨年九月二十五日付読売新聞の海外トピックス欄に「救えません〝破滅教〟」と題して次のような記事が載っていた。

「『一九八四年から十五年間に、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、ボンベイ、そして東京は地震、破滅的天候、核戦争、火山爆発に襲われる』と人騒がせな予言をする新興宗教が米国に現れた。

インド人、バグワン・ラジネーシュ氏を教祖にいただくこの宗教、全世界に三十五万人の信者を擁する。このご宜託後、オレゴン州にある同宗教の本拠地には移住を希望する信者が殺到しているとか。

同教祖、『ノアの方舟ではとても人類は救えない。救いの道は、わが教えに帰依するのみ』と説くのだが、『オレゴン州の本拠には、信者全員はとても収容できません』」。

人間の恐怖心を巧みに煽りたてる新興宗教の典型的な見本であろう。傑作なのは被害を受ける場所が金持ちの住んでいそうなアメリカの三大都市と東洋では東京とボンベイに限られている点だ。地震や異常気象などはどこでも発生するのに——。核戦争ともなればまっ先に叩かれるのは大都市ではなくて戦略基地である。何の根拠があって代表的な大都市ばかりをあげるのだろう。

核戦争といえば昨年六月十日付朝日新聞にショッキングな記事が出た。

「バチカン放送は九日、『第三次世界大戦は一九八五年（来年だ！）六月十五日にぼっ発し、地球はネズミだけが走り回る荒れ野と化するだろう』と予想する科学者グループの報告を伝え、核戦争の危機を訴えた。

この報告は、長崎に原爆が投下されて三十七年目にあたる九日に向けて、ストックホルム科学アカデミーの欧米人科学者がまとめた。

〈巻頭言〉

予言

それによると、第三次大戦は北半球での戦争に限定されるものの、米ソ両超大国が保有する核兵器が使用されれば、二十四時間以内に七十五万人が死亡、三億五千万人が重傷を負うだろう。

また放射能を浴びた人々は、たとえ生き残ったとしても流行病に対する抵抗力を急速に失い、五人に一人は精神的にも肉体的にも家族など周囲の人間を助けることができなくなる——後略」

これは予言というよりもむしろ核戦争の恐ろしさを強調したもので、その意味では軍縮運動にアピールするかもしれないが、予定日については富士山爆発と同様、あてにはならない。なぜなら未来の年月を明確に打ち出した予言で的中したためしはないからだ。

かなり以前に東京大地震の発生を予言して、年月日と時刻まで明言しながらも、はずれたために割腹自殺をとげようとした人がいた。この強い責任感には打たれるものがあったが、富士山爆発説の張本人は開き直っていると、電車内の週刊誌の中吊り広告に出ていた（ちなみに編者は週刊誌を一切読まない）。

日本列島沈没を予言した名高い超能力者にエドガー・ケイシーがいる。それによると日本沈没の兆しはたしか一九六〇年代に始まるとなっていたと思うが、二十年後の今もって何も起こらない。

ノストラダムスの予言めいた詩に至っては、解釈のしようによってはどのようにもこじつけられるという。だから、さまざまの注釈書が出ているのだろう。新訳聖書にも予言らしいものがあるが、これも理解は至難である。

ファティマのアパリション（幻）の予言は第三次大戦の発生に関するものとされており、これまた種々の解説書が出ているけれども、確実なポイントはぼやけているらしい。巷間の占い師、特に占星術師になるとシッチャカメッチャカになってくるようだ。結局何を信じてよいかわけがわからず、予言類に振り回されていると気が狂うだろう。

ひと昔前、ある超能力者から聞いた予言によると、「まもなく日本列島は沈没する。これを観察するために宇宙人が来ている。まず東京が海面下に没する。今生まれる子供が小学校に入る頃までには（六年後までには）東京はなくなっている」ということだった。あれから十年以上になるが東京は依然として健在だ。

これについて偉大な透視能力者であった故亀田一弘先生に七年前に尋ねたところ、百年後の東京を透視して、「ずいぶん古い建物が見えるから、今後百年間東京には何も起こらないだろう」ということだった。同じ予言でもこんなのなら有難い。

予言に凝って自己を失う人は案外多い。そのために悲喜劇が発生している実状を見ると、人間の生き方について切実に考えさせられる。

恐怖心をたたきつぶして大安心の境地に達するにはどうすればよいか。答そのものは簡単だ。第一に、いかなる予言にも一切耳を傾けないこと（ただし気象のごとき公的機関から出る科学的な予告には従うこと）。

次に「何が発生しようとも自分は絶対に大丈夫だ！」という強烈な信念を持ち続けること。そうすれば危険をのがれるカルマを作ることになる。第三にテレパシックな感知力を開発して自分自身の予知能力を身につけること。これならたとえ外れても他人を恨む必要はない。こうして「自分の運命には自分で責任を負う」ことが大切である。これこそ宇宙的人間といえるだろう。このような人こそ災害のほうからよけて通るのだ。会員諸氏にはすべからく『危険をのがれる特殊なカルマを持つ人間』になって頂きたい。

■翻訳連載権独占■

月の引力は1/6ではない！

ニュートンの万有引力の法則の誤り

MOONGATE By William L. Brian

ウィリアム・L・ブライアン／久保田八郎訳

〈連載第2回〉

アメリカの科学技術者ウィリアム・L・ブライアンの著書『ムーンゲート』は月の引力に関して驚くべき事実を暴露し、また月面の驚異的発見事をNASAが隠していることをあばいて、ジョージ・アダムスキーの体験記の内容が真実であったことを立証し、世界のUFO研究界に大きなショックを与えた。先号ではまず第10章と11章を訳出掲載したので、本号から原書の最初に返って第1章より逐次掲載する。この素晴らしい記事が読者に裨益すれば幸いである。

序

本書は公式な政府文書、NASA（米航空宇宙局）の写真類と記録映画、ニュース記事、各分野における権威者の書いた多くの書物などによる隠された情報源から引き出されたノンフィクション記事である。本書を書こうというアイデアは、宇宙開発計画の活動や発見物に矛盾を見つけた数名の人の勧告によって生じた。そして隠蔽が行われたことを確証するために、ある証拠の探索もなされた。その結果、多くの証拠が当初の予想をはるかに超えるほど出てきたし、真実の宇宙開発に関して驚くべき結論に達したのである。

科学的見地から当局の陰蔽を確証するために、宇宙開発の多くの面を数学的、闡明的に分析してある。本書は素人と科学者の両方のために書かれたもので、巻末に数式を加えておいた。多くのカラー写真と脚注も付けてある。

隠蔽の詳細については絶対的な確実性は打ち出せないけれども、本書の主張するところが真実を裏書きしている点、すなわちアポロ宇宙船による月着陸の一部分が地上のスタジオで行われたことを証拠が示している。月着陸は実際に行われたと思われるが、アポロ宇宙船を取り巻く真の環境や関連した発見物などは大衆の目から注意深く隠されたのである。

第1章 NASAと軍部との関係

月に人間を送り込むというNASAの宇宙開発は文官の極秘の仕事と思われていたが、軍部がほとんど完全にそれをコントロールしていたことや、NASAの諸発見は大衆の目から隠されたという証拠が、本書の到る所に出てくるはずである。

ロケットの開発と初期の人工衛星の打ち上げの歴史を本書で再検討し、宇宙開発に関する軍部の関与と、NASAの創設の原因となった出来事を述べることにしよう。ドイツはV2ロケットを開発し、第二次大戦の終わり頃にそれを用いてイギリスを攻撃したが、あまり成功しなかった。アメリカは戦後ドイツのロケット科学者を多数獲得したが、その中にはヴェルナー・フォン・ブラウンがいる。その他、ドイツのロケット関係ハードウェアーのほとんどを押収した。

ソ連もドイツのロケット技術者をうま

く獲得し、大変な熱意をもってロケットの技術的な開発をやり、大成功を収めた。戦後の年月は〝冷戦〟と超大国による核戦争の先ぶれとなり、ついでロケットは高度に洗練されたものに開発されて、数千マイル彼方の戦略目標に核爆弾を運ぶことが可能になったのである。いったいに絶滅の脅威というものは研究開発に莫大な金を使うための最大の刺激になるらしい。ロケットも例外ではなかった。

押収されたドイツのロケット情報の中には、地球の軌道をまわる人工衛星や、戦争が続けばヨーロッパからアメリカに撃ち込むはずの多段ロケットの開発計画なども含まれていた。このことは未来の戦争についての新たな考え方をひき起こし、進歩したロケット技術の開発に刺激を与えたのである。

アメリカは出遅れた

しかしアメリカがロケット研究に真剣に取り組んだのは、一九五二年に水爆が開発され、さらに一九五三年にソ連がロケットミサイルの開発に成功したという情報を入手してからである。どうやらこの情報によってアメリカ政府はＩＣＢＭ（大陸間弾道弾）の重要性に関する見解を変えたらしい。一九五三年にソ連は自らの手で水爆を実験し、一九五四年にはアメリカの国家安全保障会議によってＩＣＢＭの開発を優先する政策が承認された。それまでにソ連は大型の原爆を運ぶ巨大なロケットをすでに設計していたのである。それは軽い水爆用としては余分の容積をもっていたので、ソ連の科学者は人工衛星を軌道に乗せるのに使えるだろうと考えたらしい。

アメリカは一九四六年に発足した空軍の人工衛星研究で、ソ連の人工衛星のアイデアを予期していた。この米空軍の研究はプロジェクト・ランドと呼ばれるものである。これはダグラス航空機会社が管理したあるコンサルタントグループが職員になっていた。彼らが発表した報告書は『実験段階における世界を回る宇宙船の予備設計』と題するもので、それには技術的可能性にたいする考察、武器としての政治的心理的効果、監視と通信器としての利用法、アメリカの科学技術の優越性のデモンストレーションなどが含まれていた。だがこんなことはすでにドイツ人が考えていたもので、ランド報告やソ連が最初だとはみなされない。実際にはアメリカもソ連も軍備至上の見地からドイツの計画を拡張したにすぎないのだ。

一九四六年、米海陸航空隊はそれぞれ独自のミサイル研究を開始した。一九四七年に公刊された第二次プロジェクト・ランド研究報告には、衛星を軌道に乗せる三段ロケットの詳細な内容が述べられていた。そしてサポート技術に関する分野のいくつかを示していた。誘導と飛行のコントロール、軌道姿勢の制御、地上との通信、補助電源などである。基本的に必要であったのは、当時入手できなかったミニコンピューターと太陽エネルギー利用の電力供給設備であった。

一九四七年に国防長官が大統領の顧問に加えられ、研究開発委員会が国防省のもとにおかれたが、この委員会は軍関係のどの部門が長距離ミサイルを開発するかについて決定を遅らせたのである。一九四八年には海軍が独自の衛星開発研究を続けたのに、空軍はそれを中止してしまった。

人工衛星の開発が始まる

人工衛星開発計画の最初の声明は、一九四八年に出された国防長官報告に収めてある。一九六四年に書かれた『ロケット技術の歴史』で、カーギル・ホールは次のように述べている。

「アメリカの衛星開発計画に関するフォレスタル長官の歯切れのわるい初期の声明は、一九四九年にアメリカの衛星計画に従事して、その秘密を守ろうとしていた人々をびっくり仰天させた。このことがあってからアメリカの衛星計画について公開文書で公言することは中止されたけれども、一九五四年十一月に国防省がきわめて短いコメントを発表し、人工衛星開発計画は続けられていると報告したのである。国防長官チャールズ・ウィルソンが承認したその声明は、彼がアメリカの人工衛星計画を知らなかったと記者会見で発表した後に出されたのである。

国防省は一九五二年のミサイル計画に十億ドル以上を予算に組んだが、これはそれ以前の五年間にわたる支出の総額にほぼ等しいものであった。この金は主として近距離の地対地ミサイルと対空ミサイルに使われた。しかし陸軍は、当時、陸軍誘導ミサイル開発グループの技術部長であったヴェルナー・フォン・ブラウン博士の指導のもとに、より大型のミサイル開発に着手していたのである。

一九五一年にブラウン博士は七千トンの人工衛星ロケットの建設を提案した。だが陸軍は人工衛星に関心がないようなので、アメリカの科学者は人工衛星開発計画を促進するために民間の機関を引き入れようとしていた。一九五四年から五五年にかけて開かれた一連の科学会議に参加したソ連は、ある強力な宇宙開発計画に没頭しているという印象をアメリカの科学者たちに与えた。一九五五年には、科学観測用の地球周回衛星開発計画が承認されたとホワイトハウスが声明を発したが、どうやら大衆のほとんどは一九四八年に国防長官フォレスタルがアメリカの人工衛星開発計画を声明したことに全然気づかなかったらしい。

ソ連の人工衛星スプートニク（人類最初の人工衛星）は一九五七年十月四日に打ち上げられて、それに続いてアメリカのミサイルと衛星開発計画にたいする議会の調査が行われた。もともとスプートニク一号のビックリ成果は一九四六年のランド計画で予測されていたのだが、米議会も大衆も一九五七年まではあまり関心を払わなかったのである。これは軍事行動の隠蔽策の典型的なもので、また情報が大衆の耳に届くのがいかに遅いかの典型的見本でもある。

一九五七年に最初に打ち上げられることになったバンガード計画は鳴物入りで宣伝された（訳注＝バンガード計画は一九五五年九月九日に正式に発表された三

段式ロケット。金メッキをほどこしたマグネシウム・アルミニウム合金の科学衛星を近地点三二〇kmの軌道に打ち上げるもの。回を重ねるにしたがって図体が大きくなった)。

ところが具合の悪いことにバンガード一号は一九五七年十二月六日、ケープカナベラルの台座で爆発したのである。

しかし一九五八年一月三十一日に、アラバマ州ハンツビルでヴェルナー・フォン・ブラウンとそのロケットチームは、ジュピターCロケットを用いてエクスプローラー一号を首尾よく軌道に乗せたのである。

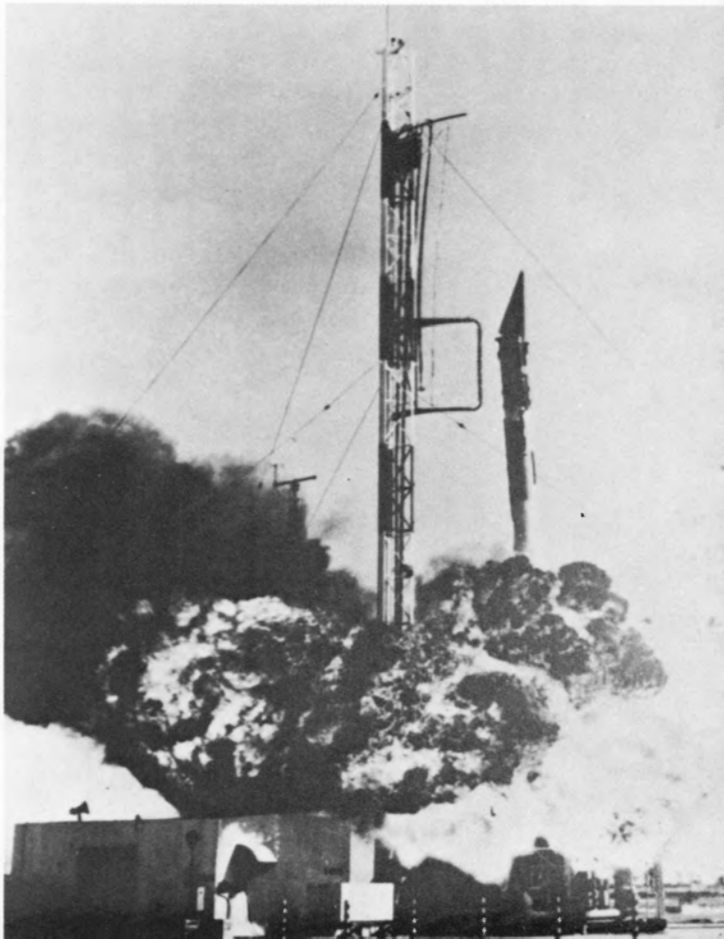
NASAが設立されたけれども

一九五八年十月一日には、アイゼンハワー大統領の四月二日における議会へのメッセージの結果として、アメリカの宇宙開発活動を調整するために、NASA(米航空宇宙局)が設立された。この宇宙開発を拡張するためのさしせまった理由の一つは、大気圏外における軍事力を最大限に利用することにあった。そこでNASAは〝民間の〟宇宙科学と探査計画を管理することになったのである。

ミサイル開発の立ち遅れを議会が長期間調査した結果、ソ連に負けずについてゆくことの重大さをやっと知ったのである。だが、どうやらアメリカの国威発揚という点では大気圏外の軍事力よりもむしろ政治屋たちにアピールしたらしい。加うるに政治屋の体質というものは大体に科学的な研究とか宇宙の探査などの理解には役に立たないのだ。したがって、宇宙開発計画の宇宙競争という面が強調されたのだが、これは政治屋が結びつくのに格好の材料であったからである。しかもこれは金のかかる宇宙開発計画に資金を出すのに必要な〝はずみ〟をつける手段としても役立った。〝民間の〟宇宙開発計画は実際にはプロジェクトの軍事面を弱くし、同時に軍事応用の技術を開発するためにできたのである。だからNASAのごとき半官半民の組織を維持することによって国の財政援助を受けることができるし、仕事もより以上に有効に達成できるのだ。

国防省に関しては一九六一年に書かれた『人類と宇宙――今後の十年間』と題する文書の中で、ラルフ・ラップが次のように述べている。

「国防省は人工衛星の分野に筋のとおった関心をもった。通信と偵察のための飛行をやると思われる執道周回装置にたいする軍部の要求があったのだ……三十六万ポンドの推力を持つアトラスICBM(大陸間弾道弾)の開発は、もっと重いペイロード(有用荷重)を有するロケットを大気圏外に打ち上げる可能性を国防省に与えたのである。……当然のことながら偵察または〝スパイ〟衛星開発計画は高度に機密化された。この事実により、民間にも適用されるかもしれないICBMロケットにまつわる軍事機密とともに、緊急のアメリカ宇宙開発計画にたいして複雑な様相が加わることになったのである。



▶台座で爆発したバンガード一号。

秘密政策が横行した

全くの平時の民間宇宙開発計画ならば、その仕事の細目すべてが明るみに出されれば最も効果的かつ能率的に遂行されるだろうが、具合の悪いことに宇宙開発科学ですらも二つの正反対の面をもつことになったらしい。

一つは、その新しい宇宙開発機関(NASA)は軍の束縛なしに自由な分野が保てるだろうという点である。ペンタゴン(アメリカ国防総省)は宇宙船やそれを推進するのに必要な巨大なロケットエンジンなどの必要を認めなかった。このことは民間の宇宙開発に幸運な中断をもたらすことになったのだが、たとえ民間があとでそれを開発したにしても、大推力を持つロケットなら軍部が利用することになったことだろう。

NASAの絶頂期から現在までを通じて、軍がそれ自体の人工衛星とミサイルの開発仕事を続けたことは見のがせない重要事である。NASAは相変わらず小さいけれども軍は依然として強大だ。民間側の研究、開発情報、民間自体の秘密計画用として宇宙開発計画を通じて開発したハードウェアーなどを軍は利用し続

けているのである。

トップシークレット（極秘）の軍事プロジェクトの実施は他のガラス張り計画で容易にカムフラージュできる。秘密計画に必要なコンポーネンツやパーツなどは、別々なメーカーに一個ずつ注文できるし、替え玉またはおとりのプロジェクトに命令すればよい。パーツは秘密裡に集められるし、メーカーはその製品の目的が何であるかを全然知らない。金のかかるおとり計画は投資名目に利用できるし、同時に高度に洗練された秘密プロジェクト用の技術を発達させることも可能である。月に人間を着陸させようというNASAの宇宙開発計画は、このようなおとりプロジェクトを軍に始めさせることになったのである。

武器の研究開発に関する軍の秘密は長いあいだ存在していた。この完全秘密政策にたいする軍の理論的根拠により、敵にたいして優越性を維持することができたのである。これによる二次的な効果もある。それは軍が何をやっているかということについて大衆が完全に無知な状態におかれるということである。そのために大衆の妨害を受けることなしに、ぼう大な量のぞっとするような研究が遂行できるのだ。

秘密というものは生き残るのに必要だと考えられている。それで大衆はいつも最新の研究による諸発見や技術の開発の背後に多年おかれているのである。秘密情報が最後的に明るみに出るとき、政府はいつもあわてて弁解するのだ。緊急の防衛により、わが国を保護するために完全な秘密を必要としたのだと。

軍部に牛耳られたNASA

トップシークレットの研究関係者を沈黙させるには、秘密防止の法律を利用してもよい。もしその法律がおかされるならば、違反者は気違いとみなされて、精神病者の施設に送られるか、刑務所へ入れられて沈黙させられるか、または他のあらゆる説得がだめならば、不幸なアクシデントに見舞われることになる。ただし筆者はだれとも秘密協定を結んではいないので全く発言は自由である。もし筆者が、だれでも入手できる、べつに秘密でもない文書の中にすでに示されている事を指摘しているだけなら、政府は無益な推測をしたというかどで筆者をとがめるか、または沈黙させるだろう。反抗的な運動を続けたとしてもべつだん意外なことではない。政府はこの分野で豊かな経験があり、実際には無限の手段もあるし、それを遂行する政府機関もあるのだ。

本書のあとの部分で、軍部がNASAの宇宙開発全体を絶えずコントロールしているという事実を痛ましくも明らかにする予定である。またNASA関係の情報の多くは厳重に秘密にされているということも明らかにされるはずだ。大衆は月面に人間が着陸したということを納得するだけの情報しか与えられなかった。月飛行に関する詳細や発見事の大部分は極秘にされたのである。

宇宙空間の軍事利用の可能性を開発しようとしている人間を分析するのは面白いことだ。こんな人たちのなかにはたしかに〝大量死〟的な考え方を持つのがいる。彼らは生命を破壊するのにより良き方法を求めているのだ。つまり敵の戦略や武器よりもまさる戦略や武器を常に開発しながら、より以上の有効な方法を求めているのである。彼らは技術が利用できるようになったとたんに月の軍事利用を考えるだろう。最後には他の惑星群が軍の前哨基地になるかもしれない。

そしてついには映画『スター・ウォーズ』で見られるような人工の戦争用ステーションが建設されるだろう。

しかし宇宙に地球人よりもすぐれた知的生命体が存在すれば、軍国主義者たちは場合によっては大気圏外で敵に出会うことになるだろう。このことはすでに発生しているという証拠をあとで示すことにしよう。

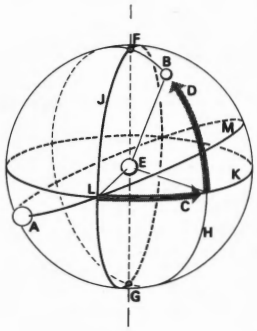
この章を終えるにあたって、NASAと軍部は宇宙開発の新発見事を秘密にしたことが示されてきたと強調したい。もし隠蔽が完全にうまくいったというのなら本書は書けなかったであろう。数千の人が多年、宇宙開発ほどの大規模なプロジェクトに関係しているのであるからには、完全な秘密保持はほとんど不可能だろう。加うるに多くの人は根本的に正直なので、沈黙を守れという圧力があっても真実を話したくなるのだ。

第二章では引力に関して一六六六年にアイザック・ニュートンが定義した基本的な法則をくわしく調べることにする。この引力の法則を惑星に適用すると間違っているという事実を示すつもりである。したがって宇宙探査機による月探査の最初の試みは予想外の結果を生み出したのである。

第2章 月探査以前の月の引力

ニュートンの万有引力の法則とは

従来の科学によれば、月は地球の表面引力の六分の一しかないといわれていた。一六六六年にアイザック・ニュートン卿が万有引力の法則を公式化したが、それは右の結論を導き出したのである。この



有名な法則によると、一物体が他の物体に及ぼす引力は、二つの物体の質量の結果にかかっているという。したがって地球のような惑星はある力をもって他の物体を引っ張るのである。またこの法則は、一惑星からの距離が大になるにつれて引力は減少するということになっている、（訳注＝正確に言えば、引力の大きさは

二質点〈物体〉の質量の積に比例し、相互距離の二乗に反比例するという）。つまり宇宙空間において、地球または月から一物体が遠ざかれば遠ざかるほど、それに及ぼす引力は弱まるのである。

ニュートンは、光の強さが光源から遠ざかるにしたがって弱まるのと同じぐあいに、地球の表面から引力も弱まってゆくことを発見した。光源から一〇〇フィートの位置にくらべて、二〇〇フィートの所にある一定の面にたいしてはわずか四分の一の量しか光があたらない。同様に、一〇〇フィートの位置にくらべて三〇〇フィート離れると、わずかに九分の一だけの量の光があたるにすぎない。この急速な減少は距離の二乗に反比例するという法則に従うからである。次の説明のために**第1図**を参照されたい。

地球の表面付近では、物体は毎秒三二・二フィートの加速度で落下する。したがって一秒経過するごとに物体は毎秒三二・二フィートずつスピードが増加する。そして加速を続けるけれども、いつかは空気の抵抗のために一定の速度に達する。

いま地球の表面から一人の観測者が遠ざかって行くとして、三九六〇マイルの高度すなわち地球の中心から二倍の距離にあるとすると、光の例と同じように、地球の引力は四分の一に減少する。この距離になると体重は地球表面の重量の四分の一になるにすぎない。したがって二〇〇ポンドの人間はわずか五〇ポンドになる。しかもその人は地表のそれの四分の一すなわち秒速八フィートで加速されるから、静止点から出発して一定の距離を落ちるのに二倍の時間を要することになる。

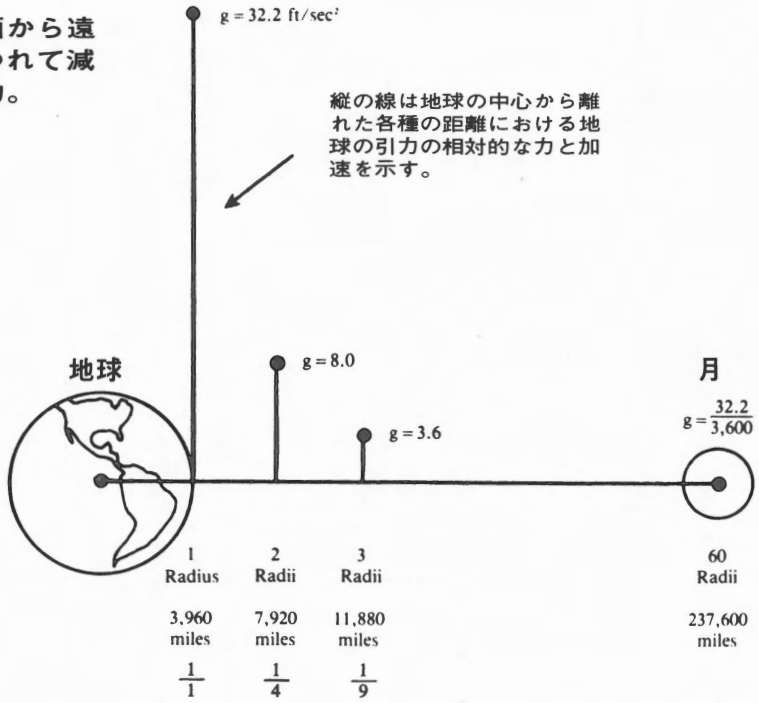
地球の中心から半径三倍の距離すなわち表面から七九二〇マイル（**図1**では3 **Radii** の位置）の位置まで遠ざかると、地球の引力は地表のそれの九分の一に減少する。二〇〇ポンドの人間ならば、わずか二二ポンドになる。一秒落下するごとに秒速三・六フィート速くなるだけだ。

月の距離になると、地球が及ぼす引力は地表のそれの三六〇〇分の一にすぎないことになる。したがって月は毎秒秒速三六〇〇分の三二・二フィート速くなって落下するにすぎない。これがもしも二十七日かそこらで地球の周囲をゆっくりと回らなければ、まもなく地球に撃突するだろう。この軌道すなわち回転が落下を防いでいるのである（訳注＝地球を周回する月や人工衛星は、厳密に言えば落下しているのである）。人工衛星は月と同じように地球をまわる軌道に乗っている。しかし人工衛星は通常月よりも地球にうんと近いために、地球の引力はもっと強く働いており、人工衛星も軌道を周回するのにうんと速く進行する必要があるのだ。月は地球のまわりを時速二三〇〇マイルで進行するが、地球上空一〇〇マイルの位置にある人工衛星は、時速約一七五〇〇マイルで飛ばねばならない。

ニュートンの引力の分析は軌道を回る月や地面に落下する物体などの観察によって考え出されたものだが、月のような天体に関して似たような実験が行われるまでは、表面引力の正しい価は決められない。ニュートンは月が他の天体に及ぼ

第1図

地球の表面から遠ざかるにつれて減少する引力。



す月の引力を予報するのに、月の質量までも決定することはできなかった。その質量は後になって地球のそれの約八二分の一と計算されたが、これは地球が地球と月の回転の共通中心部のまわりをどれだけ進行しているかを観測した結果である。こうして導き出された月の質量と地球の予報された質量が、月の表面引力を計算するのに応用されて、その結果地球のそれの六分の一となったのである。月は地球よりもうんと小さな天体なので、それに応じてより小さな表面引力を持っているはずだということは、科学者にとって不合理だとは思えなかったのだ。

平衡点の謎

宇宙船が地球を発進して月の引力の優勢範囲内に入ろうとする地点は、平衡点（ニュートラル・ポイント）と呼ばれる。そこは地球の引力が月の引力と等しくなる位置である。月は地球よりも小さく、表面引力も小さいと思われているので、平衡点はかなり月に近い所になるはずだ。たしかに月は地球の引力の六分の一だと考えられるとすれば、平衡点は地球と月のあいだの距離の約十分の九の位置になると計算される。月までの平均距離は約二三九〇〇〇マイルであるから、そうすると平衡点は月の中心から約二三九〇〇マイルの位置になる。**第2図**は平衡点を示す。この平衡点の距離は長いあいだ宇宙飛行関係科学者や技術者によって何度も予告され計算されてきたということを示すために、一連の参考資料を掲げることにしよう。

一九六五年に書かれた『宇宙飛行の原理』という本で、イギリス惑星間協会のメンバーであるM・バートレットは、次のような平衡点の計算結果を出した。

「地球（の表面）から三四六〇〇〇km、月（の表面）から三八〇〇〇kmの距離において、いわゆる平衡点Nの位置で、地球の引力と月の引力は等しくなる」

天文学者フランクリン・M・ブランレーが一九六六年に書いた『月の探険』の中で、平衡点は月から二〇〇〇〇マイル、地球からは三五二〇〇〇kmと出ている。

一九六九年にUSニューズ・アンド・ワールド・レポートによって書かれた、『月面のアメリカ』には、またもニュートラルポイントが月の表面から二二〇〇〇マイルと示されている。

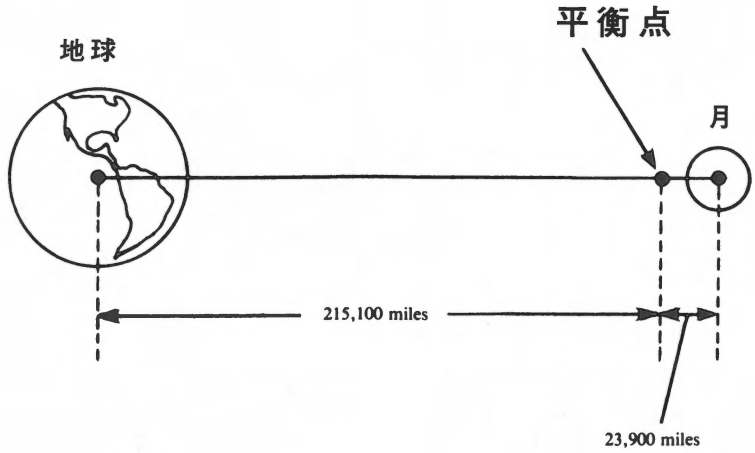
一九六五年に書かれた『宇宙探険の数学』には、マール・H・アーレントがニュートンの引力の法則を応用し、月の質量を地球の質量の八十三分の一とあらわして、平衡点を計算した。月から地球までの距離を二三九〇〇〇マイルと推定した彼の結論は次のとおりである。

「平衡点は月から二三九〇〇マイルで、月までの距離のほぼ正確に十分の九の位置である」

別な二三八〇〇マイル説が、一九六七年に『天体力学、ロケット、人工衛星、宇宙飛行』と題する著書でジョン・A・アイシールによって出された。彼は月までの距離を二三八、八五七マイルというすさまじい数字で表示して、月の質量と地球の割合を八一・五六とした。

第2図

地球と月のあいだの平衡点距離に関する従来の説。



一九六一年版のコリアー百科大辞典の『宇宙飛行』の項目には次のように述べてある。

「二つの引力の強さが等しくなり、互いに釣り合う位置があるはずで、この位置は月の表面から約二三五〇〇マイルの所にある」

一九六〇年版のエンサイクロピーディア・ブリタニカには、『惑星間探険』の項目に次のように述べてある。

「地球と月のあいだのいわゆる〝平衡点〟について。これは地球と月を結ぶ軸上の仮空のステーションであり（月から約19月レイディアイある）、そのむこう側の月の引力は地球のそれよりも強い」

19月レイディアイは月から二〇五二〇マイルに等しい。

ここで読者にとって明らかになると思われるのは、こうした数値のあいだにはわずかな差が存在するという事実である。これは地球から月までの距離の推測がわずかに異なるのと、地球対月の質量の割合などのためである。この平衡点までの距離がどんなに異なるかを、地球から月までの距離にしたがって分析すると、次に示すような結果になる。各距離は地球の中心から月の中心までが測定されたものとしてある。

全距離（マイル）	地球から平衡点まで	月から平衡点まで
二五二、七一〇	二三七、五一七	二五、一九三
二三八、八八五	二一五、〇七〇	二三、八一五
二二一、四六三	一九九、三八五	二二、〇七八

いずれにせよ、平衡点から月の中心までの距離は、二二〇七八マイルから二五一九三マイルのあいだになるが、これは月が地球の表面引力の六分の一の引力を持つと仮定してのことである。

真の平衡点は隠されている

これまでにきわめて多数の人や団体などが、さほどの大きな差なしに平衡点距離を述べてきているので、平衡点の位置に関しては疑問の余地はないように見える。技術的な素養のある読者を満足させるために、右に示した平衡点の距離の完全な値は本書の付録Aに掲げてある。

ここで読者は思い出すだろう。右の平衡点の距離はニュートンの万有引力の法則に基づいているということを――。加うるに右の数値を出した人たちのほとんどは、平衡点の本当の位置に関する宇宙開発の発見について、たぶん気づいていなかったのだ。以前にも述べたように、月の近辺で落下しているか軌道を周回している物体を観測することによってのみ、実際の平衡点の距離が出せるし、月の本当の引力もきまるのだ。この（観測による）情報は、一九五九年にさかのぼる最初の月探査機によってNASAまたはソ連に入手できたであろう。もし月探査機が一九六九年に先立ってうまく軌道に乗り、着陸していたとすれば、実際の平衡点距離は大衆にわかっているはずである。それが公開されたなら、月の表面引力を計算する正確な方法があることになる。

前に掲げた二〇〇〇ないし二五〇〇マイルの距離よりも大きな平衡点距離の発見網がいまや考えられるだろう。引力というものは地球から遠ざかるにしたがって弱くなってゆくことをすでに説明した。月は地球と同じ状況を示す。したがって、月の表面から一〇八〇マイルの位置の月の引力は（月の中心から2レイディアイの距離）、表面引力の四分の一となる。同様にして、月の表面から二一六〇マイル、すなわち3レイディアイの位置では表面引力の九分の一となる。

この考え方を心中に保つと、もし月の表面からの本当の平衡点距離が二五〇〇〇マイルよりもかなり大であるとすれば、月の表面引力は地球の表面引力の六分の一だという数値よりもはるかに大にならねばならないことになる。このことはニュートンの万有引力の法則は惑星ほどの大きさの天体までも含まないことを意味する。またこれはNASAと軍部が月の引力の本当の性質に関する情報を隠してしまったことをも意味するのだ。宇宙飛行士が月に安全に着陸しようとすれば、たしかにこの平衡点距離は正確に決定されねばならなかったのだ。これは実験によってこそ決定され得るものである。この発見の経緯については次章で述べることにしよう。

第3章 平衡点の矛盾

地球から打ち上げられる月探査機または宇宙船は、地球の引力のために平衡点に達するまでは次第に速度を失ってゆく。しかしそれが平衡点を通過したあとは、月の引力が強くなるので加速し始めて速度は増してくる。そして月を回る軌道に乗るかまたは月面に撃突するには、正確な軌道を持たねばならない。

月の引力の正確な測定と正確な平衡距離を求める必要は、IGY（国際地球観測年）のアメリカ国内委員会の理事長、ヒュー・オディショーによって指摘された。彼は一九五八年に『大気圏外の科学研究の継続プログラムの基本的目標』と題するレポートをIGYの参加国全部に送ったが、その中で彼は当時の月の質量の測定は、アステロイド帯の運動と地球の極軸の観測に基づいていたと述べたのである。月の質量のせいだとされた不確定性は、〇・三パーセントとされたが、これは月ロケットの軌道に大きな影響を与えるほどであった。したがってオディショーは、月に関する初期の実験においてもっと正確に月の質量を決定することが望ましいと述べた。これは月に接近して行くロケットを追跡し、軌道の各点で月の引力を算出すれば達成できることだ。そうすれば月の表面引力を算出できるのである。

役に立たないニュートンの法則

すでに読者はNASAとソ連がたとえ正確な平衡点の位置を知っていたとして

も、月ロケットをうまく打ち上げるのがいかに困難であったかがわかるだろう。もし平衡点がニュートンの万有引力の法則から導き出された数値よりもかなりはずれていたとすれば、月探査機をうまく打ち上げようとする試みには一連の失敗がつきまとうことになる。また、予期された月の引力の重大な誤差が発見されれば、再プログラミング、ロケット設計、月探査機設計などに多年を要するだろう。人々が自分の考えをあらためるのに要する時間も重要である。特にアイザック・ニュートンの引力に関する概念でもってほぼ三百年の教育とトレーニングを受けてきたからには、なおさら重要だ。国防省流にみれば、ここで新発見の隠蔽が起こるかもしれないと考えてよい。こうしたことを心にとどめて、平衡点の位置に関する古い考えにそって月ロケットの歴史をたどることにしよう。

月は宇宙探険の最初の標的として選ばれた。地球に最も近い天体であるからだ。ソ連は一九五九年一月二日にルナ一号と呼ばれる月ロケットをうまく打ち上げた最初の国である。このロケットは月の表面から四六六〇マイル以内を飛んで宇宙空間へ飛んだあとで地球へ情報を送り返した（訳注＝ただし月をはずれて五九五五km離れた位置を通過したが、ルナ二号は月に命中した）。

一方、アメリカは一九五八年にパイオニア一、二、三号を打ち上げて、その後、ルナ一号から数カ月後に月面から三七三〇〇マイル離れた宇宙飛行に成功した。（訳注＝一九五八年八月十七日、パイオニア〇号の打ち上げに失敗、十月十一日のパイオニア一号もだめ、十一月八日に打ち上げた二号は五五〇kmまで到達してへたばり、十二月六日に打ち上げた三号は第一段エンジンの早期噴射停止のためまたも失敗したが、一〇二三〇〇kmの距離まで飛んだ）。

ルナ二号は一九五九年九月十二日に打ち上げられ、月に命中した最初の月探査機になって、衝突する前に信号を送り返した。

ルナ三号は一九五九年十月四日に打ち上げられて月の反対側を回り、四三七二マイル以内に接近した。そして月のむこう側の写真を送り返したのである。ところがどうしたわけかソ連の月探査計画は、ルナ三号月ロケットを打ち上げたあと四年間中止されたのである！　打ち上げられたルナ各号のすべてはレーダーで追跡され、軌道と引力に関するデータが集められた。

以前にも述べたように、月の近辺を飛ぶ物体の軌道により表面引力の計算が可能になるし、かわってこれにより平衡点も計算できるのである。もし新発見事が予期されたことよりもはずれていたならば、未来の月探査を再評価し再計画するのに数年はかかるだろう。もし月の引力が予想以上に強ければ、月面に軟着陸するにはもっとはるかに大型のロケットと莫大な燃料を要するだろう。

ソ連の宇宙開発に関する機密保持ぶりはよく知られている。したがってアメリカはソ連の月探査機で得た情報から利益を受けてはいないかもしれない。

【人類と宇宙――次の十年間】でラルフ・ラップによれば次のとおりだ。

「……ソ連は自国のロケット類に関して厳重な秘密政策をとった。打ち上げの写真一枚も公開したことはない。しかもソ連はデータを科学界に提供するのが遅かった」

加うるに月をそれること三七三〇〇マイルを飛んだアメリカのパイオニア四号は、月の引力の本当の性質をNASAの技術者に理解させるほどには月に接近していなかったのかもしれない。いずれにせよ、それに続くレインジャーロケット類は、アメリカが首尾よく月にロケットを打ち込むには多くの難問をかかえていることを示したのである。

最初のレインジャーロケットは着陸の衝撃に耐えるように設計された球体の容器中に地震計を収容していた。だが具合の悪いことに一九六二年一月二十六日に打ち上げられたレインジャー三号は、目標を完全にはずれて太陽を回る軌道に乗ってしまった。レインジャー四号は四月二十三日に月に命中したが、有益な情報を全然送り返さなかった。レインジャー五号は十月十八日に打ち上げられたが、月から四五〇マイル離れて通過し、これは八時間以上も追跡された。その後の打ち上げは一九六四年まで延期され、プログラム全体が再編成されたのである。

地震計を積み込んで月面に半軟着陸するのは困難だというので、五号以後のレインジャーロケットのすべては写真撮影用だけに設計されたというのは重要なことである。この地震計は径三〇インチのバルサ材の球の中に収納されており、逆噴射ロケットにより時速一五〇マイルに減速して月面に撃突しても大丈夫なように作られていた。これは時速二〇〇マイルで花崗岩に撃突しても作動を続けるように設計されていた。月が地球の表面引力の六分の一しかないのならば、おそらく地震計は助かるだろう。しかし月の引力が予想をはるかに越えるならば、ブレーキの役目を果たす大きな逆噴射ロケットがない限り、着陸の成功はおぼつかない。明らかにレインジャー関係の科学者は六分の一という弱い引力が撃突時の速度を低いレベルに下げてくれるものと期待していた。彼らはその後の月ロケットから地震計を除いて、打ち上げをほぼ一年半ばかり延期したので、おそらく月の引力に関して何か新しい事を知ったのだろう。

ソ連は四年間の沈黙の後、一九六三年四月二日にルナ四号を打ち上げた。これは月から五三〇〇マイル以内を飛んだ。このロケットの目的は全然洩らされず、ただ次のような短い声明が出されただけであった。

「……コントロールされた実験類や測定類は完遂されている。このロケットとの電波通信はあと二、三日続くだろう」

月の引力に関する詳細なデータを得ようという目的がその打ち上げの背後にあったことはまちがいない。この情報がなければ軟着陸に成功できないのだ。

失敗だらけの打ち上げ

アメリカは一九六四年一月三十日にレインジャー六号を打ち上げたが、飛行中にカメラに偶然にスイッチが入ったとき

電気系統が焼けたという（訳注＝打ち上げの段階でカメラに高電圧のアークが飛んで、その過程でテレビ装置が破壊された）。そのために写真は送り返されなかった。この危険を排除するように電気系統を設計し直した後、レインジャー七号が七月二十八日に打ち上げられたが、これはうまくゆき、数千枚の写真を送り返してきた。レインジャー八号は一九六五年二月十七日に打ち上げられ、続いてレインジャー九号が一九六五年三月二十一日に発射された。いずれも成功し、レインジャー九号が撮影した写真のなかにはテレビで放映されたのもあった。

一方、ソ連は一九六四年五月九日にルナ五号の軟着陸を試みたけれどもフルスピードで撃突してしまった。ルナ六号が六月八日に打ち上げられて月を近傍通過し、ルナ七号は逆推進ロケットがあまりに早く作動したらしくて月面に撃突した。ルナ八号は一九六六年二月三日に月面にうまく着陸した。

アメリカの軟着陸計画はサーベイヤーと呼ばれて一九六〇年に開始された。一九六二年にはサーベイヤーの重量を三〇〇ポンド以上も減らす決定がくだされ、多くの実験が中止された。この理由は計画された打ち上げロケットのアトラス・セントールの第二段にトラブルが発生したというものだった。

一九六三年度におけるサーベイヤーの予定された打ち上げ日はむなしく過ぎて、準備完了にはほど遠い状態であった。（訳注＝一九六五年度に月へ飛んだ無人宇宙船はソ連のルナ三個だけで、このいずれも失敗した）。プロジェクトのコストは最初の見積もりの十倍にもはね上がり、多くのトラブルによって次々と打ち上げが遅れていった。

議会の調査が行われ、国会科学宇宙飛行委員会はジェット推進研究所、NASA、主要契約会社であるヒューズ航空機会社などの管理実務を非難した。

『我々は月に到着する』の中でジョン・ノーブル・ウィルフォードは、サーベイヤー計画の困難さについて述べている。どうやらジェット推進研究所の職員がこのプロジェクトの困難さを当初過小評価したことを認めたらしい。このプロジェクトは初期に充分な支援が与えられなかったことや、彼らが物事を行う能力を過信していたことを一職員は告白している。

一九六二年十月十八日のレインジャー五号の失敗で、地震計パッケージの投棄と半軟着陸の困難による今後のレインジャー打ち上げが重大な遅延に終わったというのは、たぶん偶然の一致ではあるまい。

サーベイヤー計画は当初の予定から二十八カ月も遅れてしまい、その一号が月に軟着陸したのは一九六六年六月二日であった。

月探査機を用いて月周回軌道に乗せるアメリカの計画は、一九五八年八月十七日にアトラス・エイブル一号で始まったが、それはあとの二個と同様に月に到達しなかった。

当時、もっと大きな宇宙船を建造しようという決定がくだされ、ロケットとしてアトラス・アジェナDを使用することになった。衛星にブレーキをかけるときに用いられる燃料から成っていると思われるより大きな有用荷重を運ぶには、より大型のロケットが必要だということらしい。このことは探査機が月軌道周回を達成できるように探査機の速度を落とすのに必要なのだろう。

再度言うと、一九五八年に始まった月軌道に乗せるプロジェクトは、ボーイング社がアメリカのルナー・オービター・プロジェクトの仕事を始めた一九六四年まで延期されたのである（訳注＝ルナー・オービターはソ連のルナ系列とは別物なので要注意）。

ソ連が進歩していた

ソ連は一九六六年二月三日にルナ九号をうまく軟着陸させたあと、一九六六年四月三日にルナ十号を月軌道に乗せることに成功した。軟着陸のときと同様に、軌道に乗せるにはしっかりした逆推進ロケットによるブレーキが必要だったらしい。いずれにせよ両方ともそれぞれ短期間で達成した。

アメリカのルナー・オービター一号は一九六六年八月十四日にうまく月軌道に乗った。この五号は一九六八年にうまく飛んだあと、一月三十一日に月に撃突したが、各オービターとも月の九九パーセントを上まわる地域を撮影し、月のマスコン（訳注＝月面下に部分的に集積した重い物質。月の重力分布の不均衡によるもの）の発見、または月面のある地域の引力の増大などを発見した。このマスコンについてはあとでもっと詳細に述べることにする。

平衡点距離の矛盾

以上、月探査機を分析してみると、アメリカもソ連もおそらく一九五九年には早くも月の引力の性質について明確な概念を持っていたらしいことがわかるのだ。しかし両国が月の引力をどのように扱うか、そして一九六六年まで軟着陸をどのようにしてやるかについては知っていたことは確かである。この一九六六年という年は次に述べる月の引力に関する情報を考えてみれば重要である。

読者は月の引力が地球の引力の六分の一とは違うかもしれないという示唆について気のもめる状態であったことだろう。だがこれには正しい数値を出すのに必要な基礎知識を与えることが必要だったのだ。そこで月探査機に続いてさまざまの文筆家や団体が大衆に伝えた平衡点の位置に分析の焦点をあてることにしよう。究極的にはこの情報源はおそらくNASAだろう。アポロ十一号に関して『タイム』誌一九六九年七月二十五日号に、次のような平衡点の情報が掲載されたのである。

「月から四三四九五マイルの地点で、月の引力はそのとき二〇〇〇〇マイル離れた地球の引力に等しい力を及ぼした」

読者はこの一文に驚くかもしれない。なぜなら第2章で述べた平衡点距離は、月から二〇〇〇〇ないし二五〇〇〇マイルであったからだ。『タイム』誌は過ちをおかしたのだろうか。そこでこの数字

を確証するために別な情報源をさぐってみることにしよう。

ヴェルナー・フォン・ブラウンとフレデリック・オードウェイ共著の『ロケット工学と宇宙旅行の歴史』の一九六九年版には、アポロ十一号に関して次のような記事が出ている。

「月への接近は非常に正確だったので、十九日の午前八時二十六分（東部時間）に予定されていた中間コースの修正は中止された。月から四三四九五マイルの距離でアポロ十一号はいわゆる平衡点を通過したのである。そのむこう側では月の引力場が地球のそれよりも優勢であったのだ。そのために地球から長い道のりに乗って次第にスピードを失っていた宇宙船は、いまや加速し始めたのである」

ロケットの飛行が大変正確だったので、中間コースの修正は必要なかったという点に注目されたい。加うるに、平衡点の距離は四三四九五マイルとされて、先の『タイム』誌に出ていた数字とぴったり合っているのだ。

もう一つの立派な情報源は『エンサイクロピーディア・ブリタニカ』である。この団体はオーソドックスの科学者にうけるような情報を一般に出している。したがって平衡点距離に関するこの団体の主張はヴェルナー・フォン・ブラウンと密接に一致しているのだ。アポロ十一号に関しては一九七三年版の『宇宙探険』という項目で次のように述べている。

「アポロ宇宙船の軌道の型を考えてみると、先に述べた記事が問題になってくる。アポロ十一号は一一八・五マイルの高度で時速一七四二七マイルで飛行しながら地球軌道に乗っていた。この宇宙船が正しい軌道に正確に乗った瞬間にロケットモーターに点火することによって、その速度は時速二四二〇〇マイルに加速されたのである。この宇宙船が月に向かって六十四時間にわたる飛行中、地球の引力が船体に作用し続けたため、その速度は月から三九〇〇〇マイルの距離で、地球に関して時速二〇四〇マイルに落ちてしまった。この時点で月の引力が地球のそれよりも大きくなり、月の裏側を回るにつれて加速が始まって、時速五二二五マイルのスピードに達したのである。ロケット推進装置に点火することによって、速度は時速三六八〇マイルに減速され、月を回る長円の軌道に乗った」

ここでも距離は三九〇〇〇マイルとあるが、これはやはり『タイム』誌とフォン・ブラウンが出した数字に近い。

ここで読者は思い出すだろう。第2章でエンサイクロピーディア・ブリタニカの一九六〇年版に、平衡点距離は月から19月レイディアイ、すなわち二〇五二〇マイルと出ていたことを——。この場合、距離の食い違いは同じ書物の版が違うことに起因している。

『我々は月に到着する』の中でウィルフォードは、アポロ宇宙船は月から約三八九〇〇マイルの位置で月の引力圏内に入ったと述べている。

APのスタッフによって一九六九年に書かれた『月面の足跡』では、平衡点は次のように述べてある。

「金曜日、すなわち月飛行の三日目、アポロ十一号は地球と月のあいだの長い引力の丘の頂上にあった。東部時間の午後一時十二分、月に面と向かい合った宇宙船は、月の引力が一段と強くなる地点の里程標を通過した。宇宙飛行士たちは地球から二一四〇〇〇マイル、月とのランデヴー地点からわずか三八〇〇〇マイルしかない位置にいて、ハンターがカモをねらうように目標をねらっていた」

読者はすでに三八〇〇〇マイルと四三四九五マイルのあいだのさまざまの数字の矛盾に気づいているだろう。多くの異なる数字はさまざまの精度で与えられているのだが、それでもアポロ以前の計算とは根本的に異なる範囲内にあるのだ。

二〇〇〇〇ないし二五〇〇〇マイルというアポロ以前の古くさい距離と、三八〇〇〇ないし四三四九五マイルというアポロ以後の数字のあいだの矛盾に打ち勝つ方法はない。地球から月までの距離が二二一四六三マイルと二五二七一〇マイル間にわたっていろいろあるとし、宇宙船が地球と月のあいだを直線では飛ばないにしても、このことはやはり平衡点距離の矛盾を解決するものではない。

筋の立った結論は次のとおりだ。最新の平衡点情報は、一九六九年に最初のアポロ月着陸の時に大衆に伝えられたのである。たとえそれが初期の月探査機から一九五九年代にもさかのぼって決定されたものであるにしてもだ。明らかにこの矛盾は現在まで大衆に指摘されてはいない。今日まで科学界と政府の現状は月の表面引力が六分の一であることをほのめかしているが、これは月から二五一九三マイル以内に平衡点があることを表すものである。したがって平衡点の矛盾とその含みは調査する必要がある。

月の引力は地球の六四パーセント！

月の表面引力は標準的な逆二乗則を用いて右に示された新しい数字でもって計算された。地球と月のレイディアイ、平衡点の距離、地球の表面引力などは知られているので、月の表面引力は容易に決定できる。この技術にはニュートンの万有引力の法則に必要な月の質量または地球の質量に関する知識などは必要としない。現在も有力と思われているニュートンの万有引力の法則の唯一の役立つ部分は、引力の逆二乗則である。ゆえに、地球の引力は平衡点で月の引力と等しいのであるから、その逆二乗の法則のおかげで月面の引力がきまるのである。技術的な計算は本書の付録Bに出ている。

その結果はこういうことだ。**つまり月の表面引力は地球の表面引力の六四パーセントなのである。ニュートンの万有引力の法則によって出された六分の一、すなわち一六・七パーセントではないのだ！**

四三四九五マイルという数字が、おおやけの情報源によって我々に与えられた平衡点距離の測定された数値であることを読者がちょっと考えてみるならば、当惑するような食い違いが起こってくる。次のとおりだ。

（以下13頁下段へ続く）

私のUFO目撃とGAP活動

― 北海道から東京への活動の軌跡 ―

石川公一
〈元旭川支部代表〉

私がGAPに入会したのは一九七六年の九月である。以前からアダムスキー氏を支持し、彼の著書の翻訳者である久保田先生と親交をもってGAP活動をしたいと考えていた頃である。いつものように会社から帰宅後、ステレオを鳴らしながらくつろいでいる時だった。ア氏の著書『空飛ぶ円盤の真相』（現在は文久書林から『UFO問題の真相』という題で出版中）を読んでいるうち〝突然〟GAPに入会せよ！　生命の保証はそこにある！と、体全体が震動するほどに内部からの力強い印象がわき起こり、即入会の手続きを行った次第である。まさに〝宇宙の意識の呼びかけ〟であった。

はじめてUFOを見る

そもそもUFO問題に強く関心をもつようになったのはそれを目撃した時からである。現在札幌支部会員の永倉氏からアダムスキー氏のコンタクト・ストーリーを聞かされていた私は徐々に自分でも円盤を目撃したいと考えるようになり、彼と二泊三日の予定で十勝平野での観測を試みた。当時私は大学三年で、彼の方は専門学校に在学中だった。二人とも中学時代からの同級生で、札幌市内のアパートに部屋を別々にして暮らしていた。

時は一九七五年の二月中旬である。北海道の二月といえばとても寒い季節で、雪も氷づく気温できびしいものである。目的地までは汽車を利用し、急行で四時間かかって新得という駅で降りた。

人里離れた田舎の真っ白な大地は実に神聖なる思いで、万一コンタクトが可能であるとしたら申し分のない場所であった。

夜九時、二人の視線は遥か彼方の宇宙の兄弟たちへのメッセージを送り続けた。風もなく、晴れた空のきらめく星たちは華麗なる旋律とドラマを演出しているかのようである。それにしても、やはり氷点下の気温には忍耐を要した。手足は冷え、耳は痛みさえ感じる。カイロなんかも持ち合わせていなかったのでなおさらであった。もう少し準備期間をかければよかったのに、あまりにも衝動的なことだった。

結局、朝方四時まで観測したが何も起こらなかった。だが、翌日の夕方四時頃山沿いにカーブを描きながら飛行する物体を目撃！　白い光を発して輝く球体に見えた。それがUFOであるという証拠はないが、少くとも私には〝それ〟であったと確信できたのだ！

その晩、再度観測を試みようとしたがあいにく天候が荒れてきたので中止して宿泊先で今後のことを語り合った。

自分自身が奇跡の産物

人生というのは実に不可思議な冒険であると思う。今こうして存在している自分を大きな奇跡の産物としてとらえることができる。

元来私は、宗教（＝信仰）という言葉には子供の頃から嫌悪感があり、弱い人間が求めるものであると決めつけていた。しかし、それと矛盾して宇宙の創造主の存在だけはどうしても知りたくて仕方がなかった。

小学校へ入学して間もない頃、「ねえ、お母さん、どうして人間は死ななければいけないの？　どうして年をとるの？　神様ってどこに居るの？」「お父さん、人間ってどこから生まれてきたの？」などと両親に問いただしたものである。しかし、それに対しての明白な解答は得られなかった。自分としては、人間は生まれ変わりをくり返すもので、たとえ肉体が滅びても意識（＝個性体）は必ず存在するだろうと幼い知恵ながら考えられる事柄であった。

不気味なイエスの像

小学校四年の秋、仲の良いクラスの女の子らに教会へ行ってみないかと誘いがあった。それで日曜日のある朝、六時半から礼拝があるので六時に学校の玄関前で待っているからと言われて約束したのだが、父が出張していたこともあって外が薄暗いという理由から母に足止めされ、指定された時刻には間に合わずチャンスをのがしてしまった。ところが五年生の夏に父の転勤で釧路市へ移住となって、転校先の小学校近くにあったカトリック教会に再度同級生からの誘いにより今度こそ礼拝堂を覗くことができた。

毎週土曜学校に通って聖書の勉強を少し続けたが、神父もシスターも好感の持てる人柄ではなかった。ただ不思議なことは神父とシスターの修道衣をはじめて見たという感じではなかった。しかし、例の十字架に張りつけられて顔をうなだれたイエスの像からは、重苦しい痛々しさが不気味に伝わってくるのであった。

その後、しばらく教会を離れた私は兄と二人でキリスト教のラジオ番組をよく聴いたもので、無料で新約聖書を送ってもらったこともあった。その頃私は中学三年で、再び同カトリック教会へ行くようになったのは高校二年の秋である。

生徒会役員をしていた当時、書記だっ

た友人が、ふとしたことから以前から顔見知りの教会があるけど、そこで卓球ができるのでやりに行かないかとの誘いがあったからだ。また、仲間として賛同した彼の友人たちとも親しくなってゆき、いつのまにか旧友となっていった。

小学校以来、すっかり足が遠のいていた教会も違った印象で、以前のイタリア人の神父の姿はなく別の神父がそこにいた。しかもチャーミングな女子高校生も数名見かけられ、高校生のグループで組織している会にも加わって青春時代の良き想い出となった。

黄金の十字架が出現！

高校卒業後は音楽大学を目指していたのだが、札幌の私立大学で法律を専攻することになった。その時、例の永倉氏も親元を離れてプログラマーを目指しての学生生活に入った。

札幌も六月になれば暖かい季節となり、美しいライラックの花も咲きみだれる頃で、永倉氏と時々、昼下がりの大通公園を散歩したものである。彼は当時、ある新興宗教の影響を受けていて〝霊感〟という言葉を日頃よく用いていた。まったく未知の領域である分野に私も次第に好奇心をいだくようになっていった。時々透視訓練や予知能力の開発に時間を費すようになった。

夏休みに入ってから二人は釧路に帰省した。その間、高校時代の同級生たちと大いに遊びまわり健康状態もすっかり良くなっていた。

再び札幌へ戻った後は大学で前期の試験が待っていたが終了後は彼と久しぶりに雑談することができた。そんなある晩のことである。

どちらかといえば学者タイプの彼とは真面目な話が多くて、その時も創造主の存在と未来の地球のことを話している最中だった。かつてない体験に私は驚いた！　突然、あたり一面が映像となった――。それもカラーのはっきりした色彩でもって生々しい。水色を背景に（バックにした壁のように）黄金の十字架がキラリと光を放出し、輝いているのだ！　そして、その下に赤いジュータンも見えたが何を意味するのか理解できなかった。

その年のクリスマス・イブに根室市内のカトリック教会で高校時代に知り合った神父から洗礼を受けたが動機は簡単であった。その後モーゼの『十戒』『ベンハー』の映画を続けて見た。

大学にアダムスキー氏の著書が！

ある日、永倉氏は一冊の本を手にした。それも私が在学する大学の購売部で見つけたものだった。タイトルは『空飛ぶ円盤同乗記』（現在は文久書林から『宇宙からの訪問者』として刊行されている）であった。まさにそれは本当の意味でのニュー・バイブルであった！

俄然、私に大変化が起こり始めた。今までの非宇宙的宗教の世界から大宇宙の波動へ高まり出したのだ。当然のことながら幼い頃より天体に関心があった私は宇宙という言葉を耳にした時、無限の可能性を連想させられた。

当初、アダムスキー関係以外の書物に純真な青少年を混惑させるものもあったが、今日のようではなかったと思う。以前は宗教がUFOを利用する例があったが、ブームが下火と同時にそれらも消えてくれたので一応胸をなでおろしている。

私の大学にも当時、『UFO研究会』なるものが存在していたが今は解散したという話である。私自身はそのメンバーと面識が全くなかった。それも一つのカルマであるとみなしている。

北海道はUFO目撃のメッカ

永倉氏は十勝平野でのUFO目撃のあと卒業式を終えて釧路へ帰郷し、私はその一年後、転勤して三年目という旭川の両親のもとで暮らしはじめた。

旭川市は北海道第二の都市で、札幌市に比べ人口は三分の一であるが、それでも雄大な自然のスケールは一種独特なもので、その街並はややリトル札幌という印象さえ受ける。どちらかといえば北海道全体がエキゾチックな美しさをただよわせる。いわゆる北海道共和国とでも名付けた方がよいのかもしれない。また、全日空のパイロットが語るには、北海道はUFO発生のメッカであるとのことだ！

たしかにそれは事実だと思う。私が目撃しただけでも十数回に及ぶし、旭川支部、札幌支部のGAP会員のほとんどが体験していることなのだ。

（11頁より）「なぜ専門家は、二五〇〇〇マイル以下だという平衡点距離に関するアポロ以前の主張をすべて無視しながら、しかもこの情報を流して月の引力の六分の一説をとなえ続けるのか？」

さらにもっと情報をつけ加えると、月の引力は地球のそれの六四パーセントよりも大であるかもしれないことを示唆している。隠蔽と思われることや、月の引力におけるわずかな変化にたいしても平衡点の距離が変わることなどを考えてみると、NASAは大衆にたいして少な目の数字を流したのかもしれない。平衡点が月から四三四九五マイルだとすれば、月の表面引力は地球のそれの六四パーセントとなる。平衡点を八五〇〇マイル外へ移動させて月から約五二〇〇〇マイルの位置にすれば、これは月の表面引力を地球のそれと同じ強さに引き上げることになる。

第4章で述べる種々の矛盾には、月のまわりを回る宇宙船の軌道周期や、平衡点から月へ到着する宇宙船によって得られる速度などが含まれている。一船に公表された周期や速度は、月からの四三四九五マイルの平衡点距離を裏付けしていないのだ。それらは古い平衡点距離と月の弱い六分の一引力を裏付けするだけである。したがっておやけの情報なるものはちぐはぐで矛盾しており、何かが隠されていることを意味するのである。ここで疑問が起こる。なぜ本当の平衡点距離が洩れたのか？　NASAの職員のだれかが隠蔽策を妨害しようとしたのか？

（第3章完。以下次号）

吉田有希さんとの出会い

私が旭川に移住しようと思ったのは以前からピアノを購入して歌と作曲の勉強をしようと思ったからで、ピアノを昼夜自由に弾ける部屋が欲しかったためであった。実際にピアノを手に入れたのはずっと遅くなってからであったが目的は果たされた。

当時、アマチュアのある混声合唱団の団員としてテノールを担当していた私は、求人広告と医師の紹介によって市内の病院の医事課に就職することになった。そしてそこで私との運命的な出会いを待ち望んでいた一人の女性がいた。その人こそ日本GAP会員の吉田有希さんである。彼女の功績は旭川支部設立時の主要人物で私を助けてくれた唯一の人であった。

北海道に初めて日本GAP地方支部として発足したのは一九七八年に設立された札幌支部であった。代表の伊藤氏に書簡を出したのはその年の春で、それから間もなくして札幌支部月例研究会に参加させてもらった記憶がある。そのとき知り合った山崎泰照氏とは昔からの旧友という実感がわいてきて、そのことを話すと、彼の方でも同じことを考えていたと言うものだから驚いた。その後、高野省志氏とも知り合い二人とは深い友情でしっかりと結ばれている。山崎氏の方は旭川支部設立準備中の頃から再三訪問してくれて、私の家に二度ほど泊ったことがあった。

支部を設立するということは大変困難を要するということを当初私は知らなかった。

出現するUFO！

旭川に来て初めて目撃したと思われるUFOは一九七七年の夏であった。

勤務する病院職員の計画によるキャンプに参加した時のことである。場所は、富良野市郊外にある金山湖（ダム湖）で一行は夕方到着した。夜八時頃から食事が始まり、九時半近くからキャンプファイヤーに入った。そうしているうち上空に二機のUFOが星と星の間をジグザグ飛行するという現象が起きた！

キャンプに出発する一週間前から目的地の上空に是非とも出現してほしいとの想念をブラザーズに送っていて、当日も食事中に「どうか姿を見せて下さい。私には見せなくてよいですから他の人たちにどうか証明して下さい！」と祈るように想念を送っていたところ本当に出現したのである。私は大いに歓び、ブラザーズに感謝の想念を何度も送った。

UFO目撃者はたった数名であったが前もって臨床検査技師の女性に円盤が現れるようにテレパシーで想念を送ることを話しておいたため、本人が見なかったとしても他の目撃者がいることで出現したという事実を動かすことは出来なかった。

キャンプには吉田さんも参加していたが残念ながら彼女には見えなかったらしい。またその時は日本GAPの存在は知らなかったし、私とも深い付き合いはなかった。あとで聞いたところによると以前、緑とオレンジの球体が自分の後から追いかけるようにしてついてきたことがあるということだった。

一九七九年の夏頃から、私の持って生まれたカルマが何であるかがようやく解りかけてきた。

コーヒー好きの私は喫茶店に通うのが生活の一部になっていて、たまたま行きつけの店でカウンターに座っていたところ、あとから入ってきた若い男性が左隣りに座った。はじめ生意気そうな感じで店の主人と話していたのだが、誰とでも親しくなれる性格の私はいつの間にか見知らぬその男性と会話が始まったのだ。

その時、何げなくアダムスキー問題と空飛ぶ円盤の実在を話したのがきっかけで、彼とは旭川支部設立に至るまでの間協力関係にあった。

最初の頃は二人だけで数回に及ぶUFO目撃を体験したし、あとになって彼の友人らと交流して共に観測を試みたこともあった。いずれの場合も鮮明なもので単なる流星のごときものではなかった。そのうち夜間の観測が主体で昼間の観測は二度くらいしかなかった。

その頃、まだ学生だった山内裕理子さんと友人の氏家明美さんに出会ったのも時期的に良かったと思っている（二人とも旭川支部）。とくに氏家さんにとっては会員でなかった当時、一つのチャンスであったように思われてならない。

遂に誕生した旭川支部

旭川支部設立にあたっては静岡支部代表の野口敏治氏に激励の御書簡を頂いて強い責任と「よし、やるぞ！」という気迫を持たずにはいられなかった。

久保田先生からは支部設立にあたっては一度上京して東京本部月例研究会に出席し、その上で準備をすすめてはどうかというアドバイスがあったが、先生とは対面することなく、書面で承認されただけで支部設立に踏み切った。その結果、とんでもない方向へ走りそうになったが、私の独断と偏見、そして先生の助言を頂いて大きく飛躍することができた。

旭川支部にとって模範とする支部は先輩としての札幌支部であった。しかし、それぞれ長所と短所はあるもので支部代表の意志一つによって本来の目的と役割を見失うことになりかねないという認識のもとに、私は久保田先生と直結した最も信頼される有力な支部を設立しようと決意したのだった。そして、今までGAP会員を希望していた人でも正式に入会手続きを済ませるよう強行姿勢でのぞんだ。というのも、私達はオカルト的な団体ではなく、ましてや心霊研究団体と交流するような目的を持ってはいないし、GAPの名称を勝手に私用するようなことは絶対に好ましくないことだからである。とくに、支部代表者はその二とをはっきりと区別するのが当然である。それともう一つ、いかなることがあっても自分たちを批判する連中を月例研究会に参加させないこと、いかなる関連研究グループであろうと、そこのメンバーになったり、独自のUFO研究団体を組織しないことだ。もし旭川支部がそうした態度

を明確にしていなかったならば、多大な迷惑を及ぼしたことだろう。

一九八〇年一月、ついに旭川支部が発足した！　それも二人だけの――。というのも協力関係にあった非会員らが出席しなくなったからだ。というより、私のやり方があまりにも強行策であったため立ち入るスキがなかったのである。だがかえって純粋な支部としてスタートすることができた（その時、山内さんは札幌の短大に在学していた）。

吉田さんがＧＡＰに入会したのはその頃で、アダムスキーの著書の何冊かを手渡したのがきっかけだった。それから間もなく彼女の母君が入会され、妹さん達まで入会の申し込みをしたというのだからカルマ的に深いものがあるのだろう。母君とは私も年齢の差を越えて友人同士のつき合いをさせて頂いている。また妹さん達も現在病床中の身でありながら、〝アダムスキー型円盤〟を病院の窓から二人で目撃されるなどの体験をされている。詳細については本誌78号掲載の記事を参照されたい。

川上三秀氏との出会い

当初の支部月例研究会の会場は喫茶店のミーティング・ルームを借りて行われていたが、後になって北海道のある新聞社のＢホール（会議室）に変更したのであった。札幌支部からも毎回出席してくれて充実した内容となっていった。そこへもってきて一人の男性から自宅に電話があった。その男性とは川上三秀氏のことである。月例研究会に使用している新聞社に勤務する課長であった。

川上氏と挨拶をかわしたのは前の例会に利用した喫茶店だった。その時、吉田さんにも同席してもらった。まったく見知らぬ者同士であるけど、きっと想念波動で見分けてやろうと思っていた。やはりそれは正解だった。川上氏の方から私達に笑顔でもって「石川さんですか？」と問いかけてきたからである。氏の話では約束の時間よりも早く来ていて、もしかしたら私の方が早くその喫茶店に来ているのではないだろうかと思ったそうだが、マインドを静めると「居ない」という印象があったので少し待ってみたと言う。そして、私達がドアを開けて中へ入った瞬間、すぐにわかったらしい。川上氏はオーラが見えるとのことで、その時の私が黄金色のオーラを発していたと一年位してから話してくれた。

東京の総会で感動

その年の秋は川上氏、吉田さんと三人そろって初めて東京本部主催の総会に参加することができた私は胸躍る思いだった。とにかく素晴らしかった！　講演の内容もさることながら夕食会での歌とダンス、それに楽団によるメキシコ音楽に私はしっかり溶け込んでいた。その時知り合った多くの仲間たちとは今でも友人として深く結びついている。

帰りしなに撮影してもらった川上氏と並んでの記念写真は生涯大切な想い出の一つでもある。

一九八一年は順調にスタートした。一月に初の試みとして札幌支部との新年会を開催。多くの会員が集まり、札幌支部代表の伊藤氏にも大変お世話になった。

四月に入って旭川支部への出席率は平均十名位で活気あふれるものとなった。

そんなある日、トントンと誰かノックする音が聞こえた。ハイと返事をしてドアを開けると「ＧＡＰの会場でしょうか？」とメガネをかけた細めの男性が立っていた。吉田さんが「さあ中へどうぞ」と言うと気軽に椅子に腰を降ろしたので私が問いただすと、数年前からの会員で春まで旭川市内に住んでいたと言う。現在の旭川支部代表の阿部堯氏がその時の男性であった。阿部氏にはいろんな意味でプライベートな面も含め、並々ならぬお世話になり大変感謝している。彼のことだからきっと副代表の川上氏と共に旭川支部を大きく発展させてくれると大いに期待している。

札幌・旭川合同支部大会開催

六月末には第一回目の北海道大会が幕を明けた。

遠路はるばる約四〇名もの参加で大いに盛り上がった。川上氏の令嬢、富士絵さんも姿を現して微笑ましい限りであった。また吉田さんの母君も同席されて親子での参加は二組である。

遠いところでは四国の松山支部代表の伊藤達夫氏が疲れも見せずの北海道訪問で、常日頃からご援助を頂いている。また東京本部の松本隆司氏は支部大会を入れると四回も訪れたことになる。

当時、帯広市の電話局に勤務していた安藤（旧姓大橋）博子さんから贈られたワインの味は格別であった。

第一回札幌、第二回旭川と続いた北海道支部大会は私にとって大きな仕事であったと思う。もちろん参加者全員の総力の結集によって成功したものであったことは言うまでもない。とくに第二回目の夜眠らず残業しての参加だった岩手県の柴田仁氏には熱いものを感じた。

ある驚くべき体験！

一九八二年の六月、私は人生最大のものすごい驚異的な体験をした！　それが何であったのか今語ることはできない。

三月に旭川に出現したアダムスキー型円盤といい（この円盤写真を撮影した高校生のところに久保田先生の依頼によって取材しに行った。詳細は本誌78号に掲載済）、五月に目撃した四機の母船といい、その年の旭川はＵＦＯ年であったのだろうか？　八月の旭川支部月例研究会終了後に全員で目撃した二度の銀白色の物体（ＵＦＯ）もそうだ。

旭川支部設立準備中の時に自宅近くの高台上空に夜間、連日ＵＦＯ目撃の体験をしたが、それ以来のことである。

一九八三年三月二日、私は旭川を離れて東京へ移住した。久保田先生の本部活動を応援するためであった。日本ＧＡＰの存在は私の大きな原動力であると同時に地球の未来社会を築く最先端にあると確信している。

異星の友のあたたかいまなざしが私たちに……

スペース・ブラザーズは注目している

●伊藤達夫
（松山支部代表）

今年の四月で松山支部が設立されてから丸四年になります。この間久保田先生をはじめ静岡支部代表の野口さんや多くの有力な会員の皆様にひとかたならぬお世話になりました。数々のご援助をいただき心から感謝致しております。また地元の松山支部の皆様には力不足の私をよく盛り立て、支えとなって下さいました。支部代表としてお礼の言葉もありません。今後もスペース・プログラムに協力する姿勢を貫いて、今生で与えられた宇宙的なカルマの達成に情熱と信念を傾けるつもりです。

この四年間、毎月研究会を開催して宇宙哲学とアダムスキー問題の探求に励んできました。久保田先生から支部の運営を委任された者として、東京本部の方針を正しく反映させる運営を心がけています。そしてマンネリ化を避けるためには、絶えず宇宙的な向上の意欲を高める必要がありますが、幸いにして東京月例会をはじめ各地方支部大会に出席しては高貴な会員の方々との交流を通して視野を広め、宇宙の法則に対する理解を深めることができました。

松山支部を設立以来「偉大な惑星の方々と一体である」という認識のもとに真面目に活動を続けた結果、四年間に色々なブラザーズ（友好的異星人）からの祝福と励ましをいただきました。そこで献本活動とスペース・プログラムとの関連に重点を置いてエピソードを折り混ぜながら、これまでの活動を振り返ってみたいと思います。

白銀色のUFOが出現！

昨年十月の松山月例会の終了後に発生した宇宙的な体験は、スペース・ブラザーズが確実に日本GAPを援助しておられる事実をまざまざと示した貴重な出来事だったと思います。この日松山市民会館で開かれた月例会は参加者は少数でしたが調和した雰囲気にあふれていました。

その年の夏に行われた『エルサレム宇宙考古学の旅』のスライド上映などもあって充実した例会を終えることができました。市民会館の外へ出たのは夕方の五時過ぎで、高知から出席された野島先生とお別れして駐車場に向かう頃から、何かソワソワした焦燥感にかられ始めました。上空に円盤が来ているのではないかという気がしていたので、しきりに夕日の落ちかかった空を見上げるのですが何も見えませんでした。車で海岸線を今治へ向かう途中も何かふだんと違うフィーリングが心を支配しているようでした。この日は朝からずっとブラザーズに想念で呼び続けていたのです。円盤が月例会を開いている市民会館の上空に来て祝福の想念を送っている光景をイメージに描きました。いつの月例会でも上空に想念を送っているのですが、この日は素晴らしい東京総会に出席した直後でもあり、特に強くブラザーズとの一体化の想念を送りました。

車が松山と今治の中間に位置する菊間町の近くまで来た時、国道前方の高さ百メートル位の小高い山の上に突然、白銀色のキラキラと回転しているような物体が姿を現しました。その山の上あたりに滞空したように動かず、フワフワした状態でしばらく浮かんでいましたが、五分後にゆっくりと音もなく松山方面へ移動してゆきました。最初に見た時からUFOだと思ったのですが、その姿があまりにも平和で自然のままなので、素晴らしい体験をしているにもかかわらず、ほとんど興奮したり驚いたりしませんでした。何か親しい友人に会った様なフィーリングを感じました。

この日、広島の会員・佐々木朋子さんは朝から家庭の仕事で忙しく、全く月例会に出席する気がなかったにもかかわらず、どうしたわけか「松山へ行きたい」という衝動で気分が落ち着かない状態でした。「今日は忙しいから行ってはいけない」と自分に強く言い聞かせようとするのにどうしても衝動に抗し切れず、ついに背中を押される思いで家を出て松山へ向かったということです。一方、今治市にお住まいの西本有水子さんはこの日、月例会に出席する準備をしていたところ、ご主人のカゼのぐあいがはかばかしくない為に大事をとって出席を断念されて家にこもっておられました。しかし昼近くになってご主人のぐあいも好転したので家族で外食をしようと車で遠出をしたところ、たまたま行きがかり上松山へ来ることになりました。そして夕方近くになって今治へ帰ろうとして松山の郊外まで来た時、車の中から中心が暗赤色で周囲を白い光点が回転している物体を目撃されました。その後車を運転して今治へ帰る途中で、しばしば物体を目撃され、上空から純粋な愛の想念が来るのを感知しておられます。その物体は最後には今治平野の上空に達して、クリスタルガラスを思わせる反射光が、折からの月の光に照らされて『未知との遭遇』の一場面を見るような思いがしたということです。そしてなおも高度を下げ続けて、背後の山のあたりに降下してゆくのを目撃されています。

私は西本さんが同じ日の夕方に私が目撃したのとよく似た物体を見ておられたことを彼女からの連絡で知りました。西本さんと私のUFO目撃、そして衝動を感じて広島から月例会に駆けつけた佐々木さんのそれぞれの体験をつなぎ合わせ

てみますと、客観的に見て確かに上空から共通の激励の想念波動が送られていたことは間違いありません。その想念の源泉をはっきり示すためにわざわざ上空に出現して下さったのでしょう。この一連の出来事を分析した結果、ブラザーズは松山支部に対して「決してくじけてはいけません。いつも私達がついています。信念を持って活動を続けなさい」と励まして下さっていると判断するに至りました。なぜそんな結論を出したかといえば、やはり内部の印象に従ったからとしか言いようがありません。

ところが間もなくブラザーズが上空から励まして下さったことがまぎれもない事実であることが客観的に明らかになってきました。それはこちらから案内を出したわけでもないのに、それから間もなく、私のところに数名の方から月例会の問い合わせが舞い込んで来たからです。中には積極的に献本活動をしたいので公共施設への寄贈の方法を教えてほしいと手紙をよこした女性もありました。最近松山支部は、広島地区では常時十名前後の熱心な会員が出席して盛況なのに比較して、支部発祥の松山地区はこのところ出席者が減少していました。それだけに、自主的に出席を申し込んで下さったこれらの方々の協力的な態度が本当に嬉しかったものです。それにもましてこの出来事の背後にはブラザーズの温かいご支援があったことをヒシヒシと感じ取ることが出来ました。どんな月例会の人数が一時的に減ったとしても、現象面にとらわれないでブラザーズの計画に協力する不屈の精神と不退転の信念を持ち続けるならば、GAP活動の前途は洋々と開けてくることを体得させていただきました。

献本活動に励む

松山支部がはじめて献本活動を行ったのは八十一年の六月のことでした。この月にユニバース出版社から待望の『宇宙からの訪問者』が二千部限定で再発行されたことはアダムスキー問題の啓蒙グループである日本GAPにとっては記念すべき出来事でした。これを機会に静岡支部の野口さんが図書館等への献本を呼びかけておられるのを知って早速実行してみようと思い立ちました。支部設立以来一年あまりというものは支部月例会の運営で精一杯の状態で、それ以外の活動に関心を向ける気分的なゆとりがありませんでした。しかし、その頃になってようやく気分的にも一息ついたので、設立準備段階から他の惑星の方々の祝福と励ましの想念をいただいてきた松山支部としては、何か気持ちだけでもお礼がしたいと考えていました。そこで感謝の気持ちを現すには献本が最もふさわしい方法ではないかと思いついたのです。早速『宇宙からの訪問者』を十冊ほど取り寄せて今治市内の中学校と高校・公立図書館に寄贈させていただきました。実にささやかな活動でしたが、これが支部としての初めての献本活動でした。

メキシコでスペース・ブラザー(?)に会う

献本が終わって一カ月経過したその年の八月に実施された『アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅』は私にとっては初めての海外旅行でもあり、思い出に残る数々の宇宙的な体験の連続でした。アダムスキー氏ゆかりのパロマー・ガーデンズ、デザートセンター、ビスタのア氏の家などスペース・プログラムに重要な関連のあった遺跡を視察できたことは、その後のGAP活動に大きな影響を与え続けています。しかしそれにもまして私がこの旅行で得た最大の喜びはメキシコのローカル空港でブラザーらしい人とお会い出来たことでした。この時の素晴らしい体験は終生私の記憶から消え去ることのない宇宙的な思い出として意識に刻み込まれています。

ウシュマルの遺跡を見学するために早朝にメキシコ空港から飛行機で遺跡に近いローカル空港に着いた後、待ち合いロビーで休息しながらスーツケースが運び込まれるのを待っていました。その日は朝三時に起床したので、だれもが睡眠不足の状態で、ロビーのイスに腰かけて多くの人が仮眠を取っていました。私も空港に着く頃までは気分がすっきりしませんでした。ところが空港に着いてロビーに通じる通路を歩いている頃から、どうしたわけかマインド(心)が霧が晴れるように澄み切ってゆくのです。温かくさわやかなサラサラとした高貴な想念が体を通過してゆくように感じられます。眠気はどこかへ行ってしまい、体が急にスカッと軽くなってゆきました。ロビーに落ち着いてからは立ったままで目の前で作業服を着たポーターが私達のスーツケースを次々に運び入れては順序よく並べてゆくのを眺めていると、ふと「カメラのレンズを広角に取り替えなさい」という奇妙な印象が湧き起こってきました。まったくその場の雰囲気にそぐわない印象でしたが、早速ショルダーバッグから広角レンズを取り出して標準レンズと取り替えてカメラをバッグにしまい込みました。この時印象に従ってレンズを標準から広角に替えたことが後になって宇宙的な大きな意味を持つことになったのです。

ふと立ち上がって前方を見ると、並べ終えたスーツケースの側に立っている二人のポーターのすぐ後ろに、いつの間に現れたのか、立派な体格をした男性が微笑を浮かべて私を見つめながら立っているのに気がつきました。彼は明るいグレーの空港職員の制服を身にまとい、その瞳(ひとみ)は大きく開かれて高貴な愛の想念で輝いています。彼と私はお互いに微笑を交わしながら見つめ合いました。彼と私の目が合った時、至高なる愛の歓喜の情が全身に湧き起こり、全細胞が高揚してゆくのを知覚しました。

私はその気高く輝く瞳に触れた時から何の疑いもなくブラザーだと思いました。念のためにテレパシーで「他の惑星の方ですね」と問いかけると、即座に微笑んだままで大きくうなづいて応答してくれました。歓喜の情が内部で爆発する思いでした。彼と私との間には約五メートルの距離がありました。「彼のそばに行きたい!!」という押さえ切れない衝動を感

じてそばに歩み寄って行きました。それは懐かしい親友と再会したのとよく似た気持ちだったかもしれません。こちらから握手を求めますと、彼も嬉しそうに私の手を握ってくれたのです。その手はとても大きくて柔らかく、包み込むような愛にあふれていました。お互いに見つめ合いながら私は英語で「お会いできて本当に嬉しいです」と語りかけると彼もうなずいて英語で「私もあなたにお目にかかれて嬉しい」と答えてくれました。大きな愛にあふれた偉大な人間の面前にいるのだというこの実感！　高揚感で体が宙に浮き上がるのではないかと思うほどの喜悦を味わいました。彼は私達のグループが日本GAPの旅行団だということを知っていたと思います。というのは、彼が立っているそばには金星のシンボルマークをつけたスーツケースが並べてあったからです。三分間という短い時間でしたが、その間私達は少し話を交わすことができました。私にもう少し語学力があればもっと色々なお話ができたかもしれません。それが残念です。私は旅行団が東京や広島など全国から参加していることを話しますと、彼は「長崎の方はいらっしゃるのですか？」と尋ねましたので「はい、長崎の人もいます」と答えるとしきりにうなづいていました。

この時ウシュマル行きのバスが到着したので、全員がスーツケースを持ってロビーの外へ出始めました。彼のそばを立ち去りがたい思いにかられましたが、お会い出来た感謝の思いと日本GAPをご援助下さいとの願いを込めてお別れの握手を交わしました。彼は名ごり惜しげに私の手を握りながら、「お元気でご活躍下さい」と励まして下さいました。ロビーから外へ出ようとして振り返ると彼がなおも輝く笑顔で見送っているのです。思わず矢も楯もたまらず彼のところへ駈け寄ってもう一度握手を交わしました。あまりにも唐突な行動だったかもしれない私の奇妙な態度を彼は明るく朗らかに笑って快く手を握ってくれました。

この出来事はGAP旅行団の面前で発生したのですが、この事に気づいた人はほとんどいませんでした。早朝に起床した疲れでうたた寝をする人が多かったのでやむを得なかったと思います。ただ広島の佐々木さんが二人が話し合っている光景を目撃していました。彼女は二人があまりにも親しそうに話しているのを見て「あれ、伊藤さんはメキシコに知人がいたのかしら？　そんなことは全然聞いていなかったのに」と思ったそうです。この素晴らしい体験は宇宙的な記憶として細胞にしっかりと刻み込まれました。そしてその後のGAP活動に大きな影響を及ぼしてゆきました。あのやわらかくて大きな手の感触は私の手にはっきりと焼き付いています。彼は私がこれまでに出会ったスペース・ピープルの中でもとりわけ高貴で愛の想念にあふれた方でした。

巨大なUFOを写す

ウシュマルの遺跡ではたくさんの写真を写したのですが、帰国してから現像したスライドを見ているうちに「あっ」と思わず声をあげてしまいました。なんとウシュマルの尼僧院の上空にフォース・フィールドを伴った黄金色に輝く巨大な物体が写っているではありませんか。しかもこの物体は標準レンズで写していたらファインダーの枠の外へはみ出てしまう位置にいることがわかりました。言い替えれば、広角レンズをつけていたからフィルムの枠内に撮影することができたのです。それはあの空港のロビーにいた時、「レンズを広角に取り替えなさい」とテレパシーを送ったのはだれだったのでしょうか。一方的な解釈かもしれませんが、私はあの空港職員がそうだと確信しています。私がレンズ交換を終えて立ち上がった時に彼は目の前に立っていました。しかも彼とあのウシュマル上空の金色の巨大円盤は密接な関連があると直感的に判断せざるを得ませんでした。あの巨大円盤を写させてくれたのは彼の私に対する宇宙的な温かい友情のしるしだったと今でも信じているのです。「しっかりガンバリなさい」と……。

献本活動の報いなのか

帰国してからも「なぜあのような素晴らしい体験ができたのだろうか？」と不審に思うことがあり、その原因をじっくりと考えてみました。するとどうしても旅行に出かける一カ月前に実施した献本活動に原因があるという印象が浮かび上がってくるのでした。こうしたことから、私の判断に誤りがなければ、他の惑星の方々はどんなにささやかな献本に対してでも想像以上に喜んで下さっていることを理解したのでした。特に『宇宙からの訪問者』を重視しておられるらしいこともおぼろげながらわかってきました。だれが献本しようともこの活動がいずれはGAP内部に少なからざる影響を及ぼして大きなうねりとなることや、現時点ではスペース・プログラムに協力する最も重要な方法だということをブラザーズは理解しておられたと思います。そうした背景が明瞭になるにつれて「ブラザーズがそんなに喜んで下さるのなら、これからも事情の許す限りもっと積極的に協力させていただこう」と考えるようになり、個人的な向上への意欲と並行して公共的な奉仕活動にも力を入れるようになってゆきました。

松山支部が第二回目の献本活動を行ったのは翌八十二年の六月下旬のことでした。この時も『宇宙からの訪問者』を購入したかったのですが、あいにく絶版になっていたため、かわりに『生命の科学』を三十冊買い入れて、松山の高校と大学、公立図書館に十五冊、今治の高校と短大、公立図書館と公民館に十冊あまり寄贈させていただきました。この頃になって支部内部で私以外にも「知らせる運動に協力しよう」と申し出る人が一人二人と増えてゆきました。このとき痛感したことは、支部で何をやるにしてもまず代表が意欲を燃やして物事に率先して取り組まないことには支部は前進しないという事実です。ではなぜ献本をするのでしょうか。それはブラザーズが望んでおられる

からです。これを信じなかったら絶対に献本の意欲と情熱は湧いてきません。だからこそ盲目的な信念が問われるゆえんではないでしょうか。

UFOが写っていた！

私の部屋の壁に一枚の写真が額に入れて飾ってあります。それは八十二年の七月に静岡支部大会が開かれた時の市内観光での一コマです。日本平の展望台で写したもので、野口さん、群馬の久保寺さん、札幌の吉田有希さん、それに私の四名が立っている後ろには清水市街と駿河湾が広がり、後方の山の上には母船状の物体が浮かんでいます。最初にこの写真をサービス版で送って下さったのは久保寺さんでした。その時は何の変哲もない記念写真だと思ったので未整理のまま部屋の引き出しの中へ入れておきました。

その年の暮れも押し迫った十二月二十九日のことでした。夕方、車で外出先から帰宅してガレージの前まで車を寄せた時、突然、かつてお会いしたスペース・シスターのイメージがパッと浮かびました。そのまま自分の部屋に入ると、何を思ったか手が自然に動いて引き出しを出していました。中からGAP関係の写真を出して一枚一枚凝視し始めたのです。なぜこんな動作を始めたのか自分でも不思議でした。そうするうちに久保寺さんが送って下さった例の写真が目につきました。さりげなく見やって次に移ろうとした瞬間、何か山の上に黒い物体があるような気がして、再度拡大鏡でよく見ると、茶色の棒状の前後がくびれた明らかに母船と思われる物体が浮かび上がったではありませんか。母船に違いないと直感したので早速久保寺さんに連絡させていただきました。後になって、この写真を撮影したのは群馬の植松さんであることがわかりました。画面に登場する人や植松さん、母船状の物体といった写真を構成する要素がはっきりするにつれて、この写真がスペース・プログラムに関係した重要なものだということがわかってきました。まず直感したのは、将来群馬支部が静岡支部やその他の熱心な支部と共にGAP内部で重要な貢献を果たすようになるということでした。しかも、カメラのシャッターを切った植松さんは翌八月に四国で輝けるシスターズと劇的な対面を成し遂げているのです。そうした事実を踏まえて考えてみると、この写真から色々な推察をすることができます。即ち①あの母船と四国のシスターズは同じ惑星から来た可能性②カメラを向けているのを知っていて意識的に上空に出現した可能性③あの写真が日の目を見ないで埋もれてしまわないようにテレパシーを送って発見させた可能性等が考えられないでしょうか。

私にとっては第二次の献本活動の際中に参加した静岡支部大会の市内観光で久保田先生や静岡支部の方々、その他全国から参加した会員と一緒に度々円盤が飛来するのをこの目で確かめるという素晴らしい体験をしただけでなく、このような宇宙的な意味を持つ写真が撮影されたことを心から喜んでいる次第です。テレパシーでそれを知らせて下さったシスターに心から感謝しました。スペース・プログラムに協力する活動を続ける中で様々なエピソードが発生するものですが、その一コマ一コマをハメ絵パズルに見立てて適当な場所へはめ込んでみますと、背後に壮大なスペース・プログラムに従事する他の惑星の方々の存在と、それに協力する日本GAPの関連性が明瞭に浮かび上がってきます。ブラザーズ問題については深い洞察力が要求されますが、その力を養うにはある物事が発生した場合に、前後の関連性を見極めようとする態度が大切だと考えています。これを宇宙哲学的に言えば、「発生する出来事を少し離れた場所から客観的に眺めて、主観とのバランスを取りながら判断する」という態度が洞察力を養う場合に不可欠の要素のような気がします。

大規模な献本活動を続ける松山支部

松山支部の第三次の献本活動は昨年六月に文久書林から『アダムスキー全集』が発行されるのに呼応して実施されました。今回はこれまでの活動と比較して、かってない本格的な規模となりました。献本書籍は『宇宙からの訪問者』を中心に購入冊数は総計で七十冊を越え、活動への参加会員は十名にも達しました。内訳では愛媛県では松山・今治地区を中心に三十冊、広島地区では広島市を中心に三十冊近くをそれぞれの学校や図書館、公民館等へ寄贈させていただきました。広島市では爆心地の平和公園・平和記念ライブラリーにも『宇宙からの訪問者』が会員の手で納められています。そのほか東京方面へも知人を介して東京都下の各高校に在学している生徒さんに依頼して八校に寄贈させていただきました。

この活動は現在も地元の有志の会員によって自主的に続けられています。今回はかってない大規模な献本活動でしたから、参加した会員の経済的な負担はかなりのものがあったと推察されますが、どなたもこの活動が自分に与えられたカルマを果たすことになるという認識を持ち、情熱を燃やして取り組んで下さいました。そのひたむきなご協力に代表として心から深く感謝申し上げます。協力を申し出た人々の多くは宇宙的な体験によって活動の支えを得ている人達でありました。高貴なる体験を持った人でなければ経済的にも物理的にも負担の大きい献本活動に情熱が湧いてくるわけがありません。宇宙の創造主とスペース・ピープルに対する確固たる信頼がなければとうてい実行し得ないことです。

最後にアダムスキー氏の次の言葉を引用させていただきます。

「この文明の存続が達成される為にそれを援助しようとする地球人は、自我と個人的な私欲を忘れて他人の啓蒙の奉仕に全力を尽くす必要があります。人間はヒューマニティーの為に何事かをなすチャンスがあった場合にもそれをやらなかった事からこの事が言えるのです」

これは私がGAP活動を行う上での座右の銘というべき言葉です。

●イスラエルのUFO？

一九八三年八月十二日から十日間にわたって実施した日本GAP企画第五回「エルサレム宇宙考古学の旅」に参加した伊藤達夫氏（松山支部代表）は、十四日、エルサレム郊外のオリーブ山上の昇天教会を撮影したところ、現像後に教会のそばの別な塔の左側に奇妙な物体が写っていた（下の写真）。見ようによっては円盤がさかさになったように見える。上の写真は十七日にガリラヤ湖のそばを走るバスの中から同氏が撮影した写真に黒くて細長い物体が写っていた。いずれも撮影時に本人は気づいていない。

〈世界のミステリー〉

—第1回—

絞首刑から生還した男

久保田八郎

一八九四年二月七日、米ミシシッピー州コロンビアの町の昼下がり。

市街中心部にそびえる裁判所前の広場で数百名の群集がざわめいていた。一人の男が殺人罪で絞首刑に処せられようとしている。その名はウィル・パービス。二十一歳の農夫だ。

ウィル・バクレーという男を射殺したかどで逮捕され、公衆の面前で公開処刑されようとしているこのたくましい体格の青年に向かって、保安官が呼びかけた。

「おい、最後に言い残すことはないか」

両手両足を縛られて絞首台上に立たされたパービスは前方を凝視したまま静かに答えた。

「私は殺人の罪をおかしてはいません。無罪です」

フンと鼻を鳴らした保安官は、そばへ近寄って黒い頭巾をパービスの頭にすっぽりかぶせた。ぶざまな死顔を見物人に見せないようにしてやろうというせめてもの配慮である。

続いて二メートルある絞首用の太い縄を手に取り、縄の先にできている輪を罪人の首に巻いてしっかりと締めつけた。

亜熱帯性気候とはいえ、冬のミシシッピーはかなり寒い。外套の襟を立てた群集は固唾をのんで注視する。いままさに二十一年の短い生涯を終えようとするパービスを台上に残し、保安官はゆっくりと階段を降りて執行人の方を見た。

高く差し上げた右手をさっと振る。

パービスの足元の跳ね板がはずれて体が落下！

「ひゃーっ！」

群集の絶叫が広場にとどろいた。

なんとパービスの体は輪縄からはずれて地面に横たわったのだ！ 死体のない輪縄だけが空中に揺れている——。

血相変えた保安官がパービスのそばに走り寄って頭巾を取り除いた。男は目をパッチリとあけたまま落ち着いて見上げている。生きているではないか！

「貴様、魔法を使ったな！」

狼狽した保安官はパービスの体を引っ張り起こし、他の保安官と共にまた絞首台へ引きずり上げて叫んだ。

「絞首刑のやり直しだ！」

再度パービスの首に輪縄がかけられて、またも跳ね板がはずれようとしたとき、一人の男が台上に飛び上がって来た。

「待て！ やめろ！」

法衣を着たこの人はコロンビアのメソディスト教会のシブレー師である。

「みなさん、神の御手がこの輪縄からパービスの首をはずし給うたのだ。もう自由にしてやってよいではないか！」

シブレー師の大声に群集がどよめいた。

「そうだ、そうだ。釈放してやれ！」

人々の叫び声が潮騒のごとく響き、数十名が絞首台の下へ殺到するのを見て、保安官は怖くなってきた。へたをすると自分がやられるかもしれない——。

ついにあきらめた保安官はパービスを刑務所へもどしてしまった。

奇跡発生の噂が広がった。だが信じない知事は絞首刑のやり直しを命じた。しかし暴動が発生しそうな気配を察した当局は、パービスをコロンビア刑務所から故郷の町の小さな牢屋へ移して寛大さを示した。

だが、またも処刑されることになったためにパービスの友人たちが決起し、牢屋を襲って彼を救出したのである。

生来、正直で親切なパービスは多くの人から好かれていた。多数の友人たちも彼の潔白を信じていたので、救出後は彼をかくまって地下へ潜らせてしまった。

怒ったのは知事である。多額の懸賞金付きで隠れ場所を捜索させたが成果はない。

そうこうするうちに知事が交替して、新知事は終身刑に替えてしまった。友人たちや人々はまたも神が手をくだし給うたのだと喜び、釈放嘆願の署名運動を起こしたので、表面に出たパービスは結局二十二カ月の懲役刑だけで自由の身となった。

二十年後に意外な事実が明るみに出た。ジョー・ベアードという小作人の老人が死の床で告白したところによると、ウィル・バクレーを殺したのは彼自身とギャングの一人の共謀によるもので、待ち伏せして撃ったのだという。

パービスはこの男をけっして恨むことはなく、他界後は冥福を祈った。

自由になってからは友人たちの援助で小さな農場を買い、一牧師の娘と結婚し、十一人の子供をもうけて幸せに暮らした。奇跡の男として近在で有名になったけれども、つつましやかに清貧に甘んじた。

以上は約九十年前にアメリカで起こった、れっきとした事実である。

「絞首台に上がってからも私は神に祈り続けていた。跳ね板がはずれた瞬間に気を失ってしまい、気がついたら地面に横たわっていた。無実であったから神が助けてくださったのだ」とパービスは述懐する。

それはともかくとして、がっちりとした結び目に通した縄で作られた小さな輪を、どうして彼の首がすり抜けたのだろう？

通常、絞首刑の場合、体が奈落へ落ちて縄が伸びきった瞬間に輪縄が首に食い込んで、その衝撃で首の骨が折れて即死するといわれている。伸びた縄が偶然に切れるか、輪縄の結び目が瞬間的にほどけない限り、罪人が助かるのは不可能である。パービスの場合は縄も切れず、輪縄も元のままに残っていた。輪の径よりも大きな彼の頭部が輪からはずれることは絶対にあり得ないのに——。

しかし首がついたままで彼の体は地面に落ちた。常識で考えられない奇跡が実際に発生したのだ。この理由は——永遠の謎である。

UFO問題とサイレンス・グループ

イブ・ラウルント
〈デンマークGAP〉

このQ&A（質疑応答）は一昨年六月に、デンマークGAPの元リーダーであったハンス・ペテルセン氏と、UFO問題に対する反対論者との討論において行われたものである。ペテルセン氏は現在デンマークGAPの顧問的立場にあり、今なおアダムスキー支持のために北欧で敢然と活動を展開している。

Q　UFOが別な惑星から来る宇宙船だということが、どのようにして立証されたのですか。またUFOの地球来訪の目的をあなた方はどのようにして知ったのですか。

A

(1)一九四七年の夏にアメリカのローズウェル空軍基地で一機のUFOが爆発して、その残骸が一平方マイルの広さに飛び散りました。この事件はレイミー将軍によって報告されています。

(2)一九四七年六月にW・L・デービッドソン大尉が一機のUFOを追跡して死んでいます。

(3)一九四八年一月にはトーマス・F・マンテル大尉が一機のUFOを追跡せよと命じられて死んでいます。

(4)一九四八年に米テキサス州ラレドから三十マイルのメキシコ国境内で一機のUFOが墜落しました。墜落するまでレーダーが追跡しています。UFOの機体の中には一人の乗員が乗っていて、この死体はプロボスト・マーシャル陸軍大佐の命令でテキサス州カーズウェル空軍基地へ移されました。このことは大佐が退役したときにペンシルベイニア州ハーリスバーグで証言されています。

(5)一九五三年五月二十一日、直径九メートルの一機の円盤が米アリゾナ州キングズマン地域に墜落しました。これに関する証言はだれでも入手できます。四名の乗員が死んでいました。私たちはこのような実例を二十件以上も知っており、これらの物体のいずれも地球のものでないことが証明されています。

(6)一九五〇年十一月二十一日の極秘報告でカナダの科学者W・B・シュミットは次のように言っています。

「私はワシントン市のカナダ大使館を通じてUFO問題の慎重な調査をやったが、その結果、大使館は次のように答えた。『このUFO問題はアメリカで最高に秘密にされている問題で、核兵器問題よりももっと高度に秘密にされている。空飛ぶ円盤は実在するが、その飛行の目的は不明であり、この問題は目下バネバー・ブッシュ博士が調査中である。この問題はアメリカ政府がものすごく重大なものとみなしている』」

(7)一九七四年二月二十一日、フランスの国防長官が、国防省の首脳部はUFOの行動をまじめに取り上げているとパリで語った。

(8)一九七六年六月二十二日、カナリア諸島付近のある位置で、コルベット艦アトレビーダ号に乗っていたスペイン海軍部隊は、径約二十七メートルの一機のUFOを目撃したと報告している。機体は青い光で包まれて透明であった。そして機体内部には二名の乗員がいるのが見られた。

(9)一九六二年五月二十二日付のアルゼンチン海軍からの秘密報告で、エスポラ海軍基地の司令官サンチェス・メレノはUFOについて次のように書いている。

「UFOは実在する。アルゼンチンの上空におけるUFOの出現と知的な行動は立証されてきた」

(10)一九七七年四月二十日付でアメリカの情報機関CIAが、大統領が議長をつとめる国家安全保障会議にあてた長文の秘密書簡の中で、結びの言葉は次のようになっている。

「調査プログラムを遂行するためにCIAは伸びてきた。そして、大衆にたいしてはパニックの危険をへらすような政策をとるようにすすめたい」

(11)一九七七年六月二十七日の右の一節によると、次のとおりだ。

「中東の危機に際して国連事務総長のウ・タントは、きわめて異常な物事にじっくりと時間をかけた。彼は、UFOすなわち空飛ぶ円盤は別な惑星（複数）から来つつあるという意見を持つトップクラス権威者の一人が、大気圏外問題委員会にこの推測に関して説明したと言う。

UFOはベトナム問題に次いで最も緊急の問題であるとウ・タント事務総長が側近に洩らしたというのは興味深い事実である。

(12)一九七八年六月、米国務省の国際安全保障局々長マイクル・A・G・ミショー博士は次のように述べた。

「他の太陽系（複数）から来る人間は我々にとって危険の可能性がある。そして我々も彼らにとって危険の可能性がある」

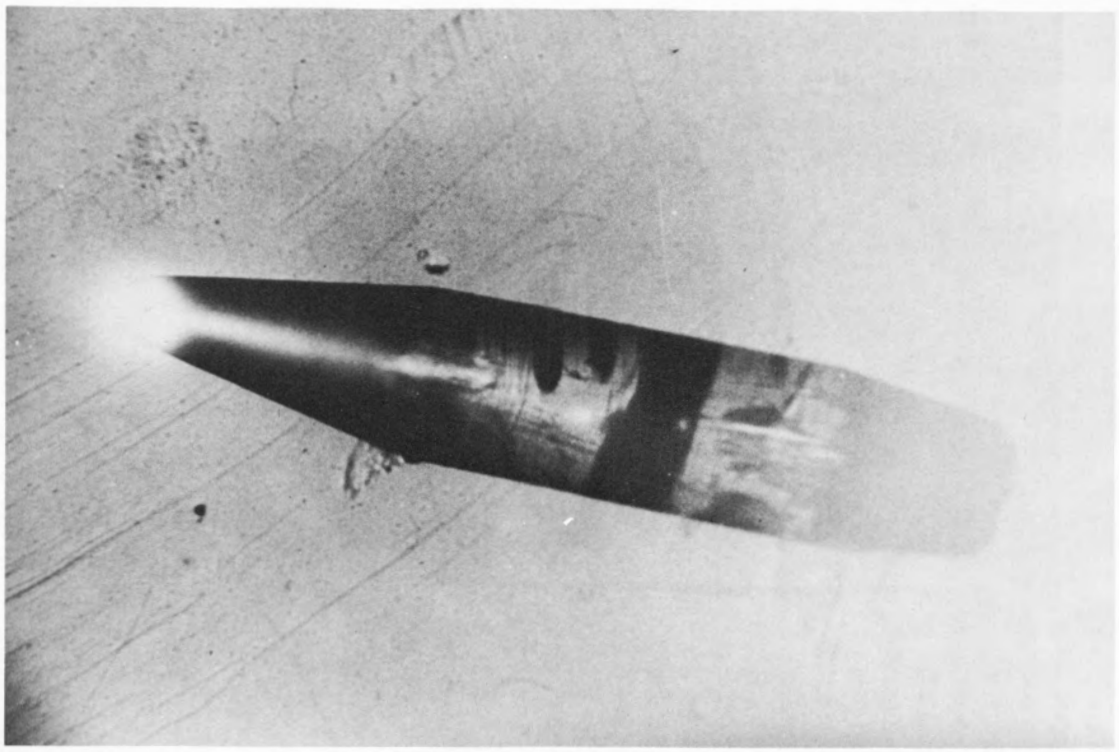
(13)アメリカのヨーロッパ防衛空軍司令官ベンジャミン・チャイドローは述べた。

「我々は空飛ぶ円盤について多くの報告を受けている。それらを追跡して失われた多くのパイロットや空軍機のことを考えて、我々は円盤をまじめに受けとめている」

Q　ハンス・C・ペテルセンとデンマークGAPは、アダムスキーに関する事柄をまだ支持しているのですか？

A　支持しています！　この点に関しては、UFO問題やGAPに対して攻撃的な立場をとらずに、あなたがもう一度新しいものに目を向ける機会をつかもうとするならば、それができます。

しかしここで思い出して頂きたいのは、アダムスキー氏によって撮影されたUFO写真類は、専門家の分析によって本物と判明した事実です。国連はアダムスキーを招待しましたし、オランダのユリアナ女王も彼を招待しました。バチカンも招待しました。そのときアダムスキーはUFO問題における業績にたいしてヨハネ二十三世から黄金のメダルを与えられ



▲アダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影した火星の母船。（アダムスキー財団提供）

ました（訳注＝アダムスキーがバチカン宮殿でローマ法王ヨハネ二十三世から金メダルを与えられた件については、アダムスキー全集第七巻『アダムスキー論説集』〈文久書林刊〉を参照）。これはあなたがひどく反論するよりも、我々が本当だという感覚を持っていることを示すことになります。

Q ハンス・ペテルセンさん。あなたはUFOは別な惑星から来る宇宙船だという説を支持しないUFO研究団体やUFO研究家はすべて無知なのか、それとも（UFOを否定する）CIA（米中央情報局）のために役立っているという意見をお持ちなのですか？

A 全くそのとおりです！ 証拠によりますと、昼夜地球の大気圏内で行動している別な惑星の宇宙船は地球で着陸したり地球人とコンタクトしています。この事実をまだ信じないで自発的にUFO研究をやっている人やグループは、この問題から去って行って、別な趣味を見つけるとよいでしょう。

この人たちがいわゆるUFO問題を心からまじめに研究するならば、そしてオープン・マインドを持ち偏見なしにやるならば、我々や一生懸命にやっているUFO研究家たちがすでに見い出しているのと同じ事をすぐに見い出すでしょう。CIA、KGB（ソ連の国家保安委員会）、FBI（米連邦検察局）などは、だれにもUFO問題に足を突っ込めと命じたわけではありません。確実なのは、これらの機関は世界のほとんどの国に関係しており、アレン・ハイネック教授はこの機関の一員であるという証拠を我々は持っています。アメリカの大統領がUFO問題を公開するのを妨げているのはCIAなのかどうかは知りませんが、CIA以外には考えられないことです。

Q デンマークGAPが本当に数々のセンセーショナルな証拠を持っているのなら、『ナショナル・エンクァイアラー』紙がそのような証拠を提供した人に出すと約束した莫大な賞金と引き換えたらよいではないですか。

A 『ナショナル・エンクァイアラー』紙の判定委員会にだれが座っているかは我々には全くわかりません。そのことをあなたは理解してかかるとよいでしょう。

しかしこの質問はもっと大きな意味を含んでいます。つまり、なぜ大衆が知らないこんな物事が、このきわめて長い議論で追求されるのかということです。UFO問題はゆがめられ、否定されていますから、それは大衆に共通した知識ではないのです。しかもこうしたやり方は、多くのUFO団体やUFO研究専門家たちによって、さからわずに支持されてきたのです。なぜならこの人たちは局面全体の中にその問題をとらえるほどの老練さまたは想像力を持たないからです。そして最も身近な生活保障の政策に必死になってしがみついており、根本的にはUFO問題に反対する勢力を暗黙のうちに支持しています。というのはこの勢力はその背後に圧力を持っているからです。建設的、国際的なUFO研究活動をやっている我々はこうした勢力をサイレンス・グループと呼んでいます。このグルー

プには、UFOの真相が公開されることに反対する人たちが属しているのです。
（久保田訳）

訳者付記　サイレンス・グループとは、真実のUFO問題が地球世界で明るみに出るのを妨げようとする暗躍団体を意味する。すなわちアダムスキーが伝えた別な惑星の宇宙船の推進原理は電磁気的なものであり、人工重力場の創造によって機体を無重量状態にすれば、わずかな推力で光速に近いスピードで進行できるところから、このような推進方式を地球に導入することを示唆したアダムスキーと、それに呼応してそれを政策に取り入れようとしたアメリカの一大統領にたいして、その問題を阻止しようとしたサイレンス・グループの暗躍があった。アダムスキーは生前にピストルで二度ほど撃たれたが、スペース・ブラザーズが防いで事なきを得たけれども、大統領は悲運に斃れたという。現在もサイレンス・グループはニセのコンタクティーをつくり出してはアダムスキー問題を攻撃させて抹殺しようとしていると考えられている。

またそのような自称コンタクティーが、かつてアダムスキー攻撃の本拠地であり、サイレンス・グループの巣であったスイスあたりから出たことも興味深いことである。アダムスキー問題を惑乱する勢力が今なお活動中とすれば、ニセコンタクティーの利用が最も効果的だろう。

○　○

ピラミッド上空のUFO

モルテン・グレンチュ
（デンマークGAP）

最近、旅行中に撮った写真を調べているうちに、エジプトのギザで撮ったこの写真にでくわした。これは一九七七年、一月四日から十八日のあいだのある日の夕方、スフィンクスとピラミッドのある場所で逆光で撮ったもので、〝雲〟はまちがいなくアダムスキー型円盤に似ている。右端にも別な円盤型の雲が見えるが、少しぼやけている（左頁の写真）。

上の写真の円盤状のものはバックよりも少し黒いが、硬調印画紙に焼いてみると明瞭になってくる。（下の写真）。しかも円盤の中心部に丸窓のようなものが見られる。

距離は数百メートル離れているようで、かなりの大きさであるようだ。

多くの円盤写真と同様に、外形がぼんやりしているのは、保護作用として円盤を取り巻いているイオン化したフィールドで、これはスペクトル分析のあらゆる色をあらわすことがある。これが船体より強く放射されると、厚い雲のようになり、そのため船体は包まれて隠れてしまい、目に見えなくなる。このことはアダムスキーの『さらば空飛ぶ円盤』（日本語訳は『UFO問題の真相』文久書林刊アダムスキー全集第二巻）に述べてある。

その書の中でアダムスキーは多くの円盤写真に見られる〝穴〟効果についても述べているが、これは船体周囲のニュートラルになった小さなフォース・フィールドによって生じるもので、このために船体の一部が見えるようになり、レーダーにも映るようになる。これは下の写真の中心部に見える〝窓〟の理由になるかもしれない。

しかもこのような写真は、一九六八年にブルース・キャシーが出した説を思い出させるのである。それによると空飛ぶ円盤の活動は世界にまたがるグリッド・システム（ゴバン目網）に従っているというのだ。この一枚の写真では何も証明できないにしても、カイロ近郊のギザ地区はそのシステムの重要な一点になるという。

（久保田訳）

■宇宙哲学解説講座■(3)

奇跡を起こす 驚異のイメージ法

久保田八郎
〈日本GAP会長〉

先号のこの記事で『具体的な実践法』と題する小見出し（83号17頁）の二段目に「このミラクル・ワードをとなえるときに、ついでに、すでに実現してしまったイメージを描くと効果は倍増する」と述べたが、紙面の都合により説明を簡略にしたために、充分にのみ込めなかった方も多いのではないかと思うので、今回は詳細に説明しよう。

信念の本質

人間が何かを実現させようと思えば、まず強力な信念を持ち、次にその実現の方向にむかって肉体的な努力をするというのが一般の概念であった。だから信念の弱い人は何をやってもうだつがあがらないし、成功もしないで、劣敗の人生をすごすと考えられていた。これは常識とされており、疑う人はいない。

それにもかかわらず多くの人が物事に失敗しては悲歎の涙にくれたりする。事業につまづいて莫大な借金をかかえ、一家離散の憂き目をみたり、心中したりする。この場合信念に基づいて奮闘努力したけれどもツキがなかった、つまり運が悪かったといってあきらめるのが普通である。そして結局、人間には運がつきものだと考えるようになる。ついには信念などというものはほとんど重要ではなく、問題は計画の方法と資力であり、それらを統括するものは、つまるところアタマなのだと思うようになる。これだけならともかく、学識教養が高くないとだめだと思い込むようになったあげく、高度な学歴がなければはい上がれないと考えるようになり、劣等感にさいなまれるようになる。こうなると、どうしようもない。

このような人は信念というものの本質をほとんど知らないで、ただ観念的に、信念とは「何かをやろうとする意志の力」みたいなものだろうと漠然と考えている程度にすぎない。ちなみに常用している岩波国語辞典第三版によると、信念とは、「それが正しいと堅く信じ込んでいる心」とある。これでいいのだろうが何か物足りない感じがする。アメリカ人にとっての〝国語〟大辞典である American Heritage によると、信念に相当する英語の faith の説明は重要な順に六種類あげてあり、その第一番目には「人間、考え方、物事の真実さ、価値、信頼性などについての確信」とあるが、二番目に、「筋道の立った証拠、または物的証拠に基づかない確信」とあり、例文として、「奇跡（発生）にたいする確信」とある。これだ、重要なのは！

人体には無限の力が潜在する

信念は「何かをなそうという意志」どころではなく、これには偉大な力がひそんでいるということをまず知ってかかる必要がある。これについてはアダムスキーの著書『宇宙哲学』の『信念』の章で、信念は人間の非個人的な状態をあらわし、一方信念の逆である恐怖は自己中心の状態であると述べてあり、信念は（宇宙の）原理または〝因〟に基づいているけれども、恐怖は結果（現象）に基づいていると説明してある。そしてさらに一粒のカラシ種ほどの信念があれば何でもやれないことはないというイエスの言葉を引用し、カラシ種ほどの量ではなくて信念の質の問題だと言っている。

つまり信念とはわずか五尺二寸の小さな有限の肉体から出る物理的な力ではなく、コズミック・パワー（宇宙力）につながった無限ともいうべき力と英知の発露であり、そのような自覚のもとに信念を発揮するならば、一個人に無限の可能性が展開するというのである。

具体的に言うと、人間の強烈な信念には驚異的な力がひそんでいて、それをうまく行使すれば奇跡を起こすことも容易なのだ。そのための実践法として日本GAPではかねてから『ミラクル・ワード』を反覆してとなえる方法、すなわち反覆思念法と、心の中にイメージを描く方法、すなわちイメージ法を提唱して、かなりの成果をあげてきたのだが、この方法がどうもまだよく理解できないという人も多いようなので、ここに再度述べることにしたのである。

1、反覆思念法

右の三種類の内、反覆思念の偉大な効果については、むかしから神戸市の直道会の会長・巽直道（たつみじきどう）先生の指導により、難病患者の奇跡的な治癒現象が続出している例からみても容易に理解できる。思い込むことは必ず実現するというのを『心の法則』と名付けて、病院で見離された患者に「治る、治る、必ず治る、きっと治る」という言葉を何日も連続してとなえさせることによって、ガン、中風、リューマチその他の難病が続々治ってゆく現象は現在も同先生のもとで発生しているという。

なぜ信念によって病気が治るのか。これは人間の放つ強烈な想念波動が肉体細胞に影響を及ぼして患部に変化を主ぜしめると考えられているけれども、科学的

にはまだ原因がよく解明されていない。

しかし重要なのは、科学的に因果関係が解明されていない現象をすべて信じてはならないという西洋の唯物論的思想にとらわれて、驚異的な現象を簡単に無視するような単純な態度をとらないことだ。むしろ多数の事実に着目して帰納的に法則の存在を洞察するほうが進歩的な態度である。

信念で（言い替えれば心の持ち方次第で）病気が治るというのは昔から新興宗教などで応用されていたが、この想念の肉体に及ぼす影響も究極的には物理作用と考えられるのに、こうした治癒現象を霊力とか信心にたいするオカゲであるとか称して、外界からの神秘的な作用であるかのごとく思い込ませることによって信者を納得させては金品を徴集するという行為が一般化したために、想念の力を迷信視して、このような実践をする人を宗教がかっていると批判する向きがあるのは残念である。想念と肉体との因果関係はいまや精神身体医学で研究されているのだ。

前述のとおり巽先生の指導下で難病が奇跡的に続々と治っている事実を見れば、〝想念〟というものに測り知れない、ある偉大な力が潜在していることは間違いない。それは常識を超えた魔術的な力であって、まだ科学では解明できない何かのエネルギーと英知を持つ放射線または波動であろう。ところが人体にはこれとは別にコズミック・パワー（宇宙力）が存在し、人体を生かしている。これをアダムスキーは宇宙の意識と呼んでいるが、名称はどうであれ、人体を完成させ、生成せしめる英知または生命力というものが全身に満ちていることを認めねばならぬとアダムスキーは言う。そして想念を発するマインド（心）なるものは、原因としてのコズミック・パワーから出た結果（現象）であるので、本来これは不可分の関係なのに、現代の一般人はこのコズミック・パワーの存在に気づくことなく、ひたすらマインドだけで考えるために本当の意味での信念がわき起こってこないのであるという。

つまり本当の信念とは、自分の肉体を生かしているコズミック・パワー（英知を伴う宇宙力）の存在を認めて、マインドをそれと一体化させるときに起こってくるのだ。もっと言い替えれば、「自分は、大宇宙を形成し万物を生かしている創造的なコズミック・パワーに生かされているから、心身共に完全円満である」という想念を起こし、単なる肉体人間を超えた宇宙的な無限の能力を持つ者であるというようなフィーリングを起こしてこれを持続させるのである。

このようなフィーリングを起こした状態をアダムスキーは「マインド（心）と宇宙の意識との一体化」と言っている。

この種のフィーリングを常に起こすならば、絶対的信念というべきものも起こってくる。「何をやっても自分には不可能ということはないんだ！」という強烈な確信に満ちてくるのである。こうした状態にまで昇華してから、病気の治癒その他、自分が計画して実現させようとする物事、すなわち願望が「すでに実現してしまった、実現してしまった、自分は嬉しい」という種類の言葉を絶えず繰り返すことによって、不思議に実現するのである。特に難病の治癒は奇跡的に発生するのであって、日本ＧＡＰ会員のなかにもこの反覆思念法を応用して、ひどい病気を短期間に治した方があるけれども、多くの奇跡的実例を知りたい方は、左記宛照会されるとよい。

〒652 神戸市兵庫区下祇園町十四番一号
直道会
電話（０７８）３６１－３２４３

反覆思念用にとなえる言葉を筆者はミラクル・ワード（Miracle Word＝奇跡を起こす言葉）と名づけて、これを応用することを将励している。はっきりと口に出してとなえ続けてもよいし、心の中でとなえてもよいが、力強く口に出してとなえるほうが効果的である。

2、イメージ法

反覆思念法の効果もさることながら、これと似た方法にイメージ法がある。場合によってはこのほうが偉力を発揮することがあるけれども、通常は反覆思念法と併用すると最高によい。

イメージ法とは、望ましい物事を実現させようとする場合、すでに実現してしまった光景を明瞭に心の中でイメージとして描くのである。すると必ず実現する。このことはアダムスキーの『生命の科学』の最後の『要約』のところでも次のように述べてある。

「何かを現象化しようと思う場合に、それを生み出す意識の能力は無限であるという確信と共に、その物事の意識的な青写真を持つのです。次にその青写真中のアイデアを捨てないようにし、それを現象化せしめるのに言葉による命令が充分な確信と共に与られねばなりません」

これはまず心の中にイメージを描いて、次にミラクル・ワードをとなえよという意味であって、我々はこれを応用しているのである。

イメージを描くといっても、ときどき瞬間的にチラチラッと空想する程度ではだめで、目をつむって、すでに実現してしまった光景を少なくとも五分ないし十分間はじっと描き続けることが必要だ。そうすると内部の宇宙の意識にそれが刻まれて、実現する方向へ宇宙の意識が推進すると考えられるのである。

たとえば素晴らしい女性と結婚して幸せな生活をすごそうと思えば、理想的な性質の女性の顔かたちをはっきりと心に描いて、次にその女性と首尾よく結婚して盛大な披露宴の席で多くの人から祝福されている光景を描く。そして「必ず実現する。私は嬉しい。私は幸せ！」というようなミラクル・ワードを反覆してとなえ続ける。そのとき不安や疑惑をかけらも起こしてはいけない。必ず実現するのであるという絶対的な確信を持ち続けねばならない。自分自身を確信のかたまりにするのである。

そうすると、いつの日か、どこかで、イメージどおりの女性がひょっこり出現

して知り合いになり、めでたく結婚するようになる。それは不思議なぐらいに実現するのであって、けっして偶然の一致ではない。なぜならこのイメージ法を応用して奇跡的に素晴らしい花嫁にめぐまれたという実例が日本GAP会員中に多くあるからだ。

結婚ばかりではない。自分にとってどうしても必要な品物で、さしあたって先立つものがないために急には入手できないが、しかしどうしても入用だというような物があれば、それがすでに入手できて大喜びしている光景を心中にはっきりと描き続けるのである。そうすると必ず実現する。実例は沢山あるが、少しあげると、日本GAP会員で伊豆半島の中伊豆町に住む高梨和明氏は、かねてからUFO観測用の特殊な自動車が欲しくてしようがなかった。ボタンを押せば車の屋根がサーッと開いて、運転台に座ったまま大空が見渡せる便利な車だ。これにはトヨタセリカ・ダブルエックスといいい車があるけれども、なにせ二百五十万円する。とても手が出ない。だがUFO観測に熱心な同氏にとってはノドから手が出るほど欲しい品だ。

そこで反覆思念法とイメージ法を実践したのである。するとまもなく奥さんのご両親が現金を無条件で出してくれたので難なく車が入手できたという。同氏には他にも奇跡的な実例が少なからずある。これは反覆思念法やイメージ法を少しも疑うことなく、むしろこれ以上に素晴らしい方法はないと考えて、熱心に実践しているからである。

日本GAPには他にも多くの実例があるけれども、紙面の都合により省略しよう。

イメージ法で超能力開発

イメージを描けば願望が実現すると言えば、非科学的ないかがわしいことのように思う人があるだろうが、科学で解明不可能な現象をあたまからバカにしてかかると、ものの考え方に進歩はない。現象の裏面を見抜くというするどい洞察力を持つことが激烈な社会を生き抜くのに必要である。だから科学では解決はつかないけれども、強烈な想念を起こすとかイメージを描いたりする行為には、なにかすごい神秘的なパワーが含まれているらしいと考えて、これに着目する人は人生に失敗はないだろう。くどいようだが、そのような実例は多くあるからだ。それで日本GAPはかなり以前からこの方法を提唱し実践してきたのである。

ところが、イメージ法と全く同じ原理を応用して超能力開発の素晴らしい成果をあげている団体が別にあることがわかった。それは東京五反田の国際心理開発協会である。創始者は会長の小林充氏で、受講者にきびしいトレーニングを施すことによって、信じられないような超能力を発揮するように指導しておられるのだ。

どうするのかというと、一人が木製の割りバシの両端を両手で水平に持っている。それを他の人（トレーニングを受ける人）が名刺を右手に持って振り下ろし、名刺のフチでもってハシをまっぷたつに切るのである。名刺は紙製だから、紙よりも固い木製の割りバシなど切れるはずはないとだれしも思うだろうが、それが切れるのだ。なぜ切れるかというと、振り下ろす前に、名刺を「鋼製のするどい刃のついたナイフである」とみたてたイメージを描き、次にその名刺によってハシがスパッと切れてしまったイメージをしっかりと描く。そして振り下ろすと切れるのである。最初は切れなくて、名刺のほうがキズついたり破れたりして山のようにたまるだろうが、意に介することなく、「必ず切れる！」という強烈な信念を持って、切れてしまったイメージを描き続けるならば、いつか必ず切れるときが来る。途中であきらめてはいけない。根気よく続けるのだ。

あるいは固いスプーンをいとも容易にねじ曲げることもできる。ユリ・ゲラーの場合は、「曲がれ」と念じながら指でしばらくさすっていると、スプーンがひとりでに曲がるというものだが、小林氏の場合は、スプーンを手にするとすぐにグルグルッと曲げてしまう。若干の力を加えるようだが、それにしても一種の奇跡的現象だ。これもやはり、すでに曲がってしまったイメージを強烈に描きながら行うのである。

もっとすごいのは、厚さ五センチもあるような部厚な電話帳を（東京都の電話帳はそれぐらいある）、両手でつかんで、まっぷたつに引き裂くという芸当を小林氏のグループでは簡単にやっている。五センチどころか本誌のような薄い雑誌でさえも、両手で一挙に四十頁全体を左右に裂いて分離させることは、常識で考えられないだろう。それがやれるのだ。これも「すでに引き裂いてしまった」というイメージを描きながら練習すると必ずやれるようになるという。

この話を筆者が昨年十一月の東京月例会で話したところ、俄然関心の的になったらしく、その後まもなく、遠藤昭則君（千葉県）が電話をかけてきて、奥さんと二人で名刺を用いて割りバシ切りをやってみたら出来たと報告してきた。その他数名の会員の方からも出来たと聞いているし、静岡支部代表の野口敏治氏は厚い雑誌を両手で引き裂くのに成功したということだった。イメージ法については古い会員の方は充分に理解しておられるはずであるから、各自で練習してみるとよい。必ず何らかの成果があるはずだ。

本格的なトレーニングを受けたい方は左記へ照会されるとよい。トレーニング料は二日間で十六万円となっている。

〒141東京都品川区西五反田二―二五―三
秋吉ビル三階　国際心理開発協会
電話（〇三）六五三―七六〇三

筆者が直接に小林先生から聞いたところによると、イメージを描いてこのような超能力を開発するのは、人を驚かしたりケムに巻いたりするためではなく、まず健康を保つことを目的とするのだということだった。たしかに人間にとって最重要なのは健康の維持である。病人になったら何もできない。強健な体力があらゆる人生活動の基礎になる。そこで割り

バシ切りから始めて確固たる信念を持たせるようにし、この強烈な信念によって自分で病気を治したり、その他人生のあらゆる面で応用して、素晴らしい生活をすごすように指導するのだという。これは我々が応用している宇宙哲学的な生き方と同じである。ここには怪しげな心霊的要素もなければ、宗教的雰囲気などもみじんもない。小林氏は人間の潜在意識の偉大な効用について力説するだけである。これはアダムスキーの説く宇宙哲学に通じるものがあるようだ。

いったいに超能力者というものは、他人の面前で実演して驚かせるだけで、超能力開発法を伝授しようとはしないものだが、小林氏の場合は望む人には人間だれもが持つ偉大な潜在能力を引き出すように指導するのだから、未来の精神分析学または心理学を先取りしているともいえよう。

アメリカの素晴らしいイメージ療法

アダムスキーの宇宙的哲学がそうである。彼を新興宗教の教祖だと評する者がいるけれども、この人たちは宗教と哲学または心理学の区別がつかないらしい。新興宗教の特徴は、人間によって設定された信仰の対象物を礼拝させることによって信者に心の平安を与え、その代価として金品を提供させることにある。信者の関心は外界のその対象物にしかなく、自己に内在する偉大な潜在能力については夢想だにできない。いわば一種の催眠効果によって自己を失っているのである。

「これではいけない。内界(人間の内部)に宿る偉大なコズミック・パワーまたは宇宙の意識を認識して、マインド(心)がそれと一体化するならば、実際に超人的な力(テレパシー、透視力その他)が発現する」と説いたのがアダムスキーの宇宙哲学である。これがなんで宗教だろう。でたらめな批判をする前にアダムスキーの著書をよく読むことだ。

それはともかく、イメージを描いて物事を実現させる、特に難病を癒やす方法はアメリカの一部の医師が応用しているという記事が『オムニ』誌に出たことがある(一九八三年二月号)。それによると、アメリカでグレゴリーという男の子に九歳のとき脳腫瘍が発見された。外科手術や放射線治療もだめで絶望的になった。そこでカンザス州トピーカのバイオフィードバック精神生理学研究所の医師団がイメージ法を応用し、坊やの脳腫瘍が治ってゆく様子を心の中に描くように教えたのである。坊やはそれを壮大な宇宙戦争として視覚化し、白血球が強力な宇宙戦闘機となってガン細胞をやっつける光景をイメージとして心の中で描いた。坊や自身は全編隊の指揮官となり、担当の医師団が地上の司令官となった。すると一年たって脳腫瘍は姿を消したのである！　現在は十三歳だが再発のきざしはないという。

これは感動的な素晴らしい実話である。こうした精神療法になるとアメリカの医学者の一部はかなり進歩的である。このようにしてアダムスキー哲学は次第に実証されつつあるのだ。

また同誌によると、米ノースカロライナ州ダーラムの人間本性研究財団で、テレパシーによる遠隔透視の実験を行っているマリリン・シュリッツ博士は、「エゴが支配権を握っていると、超心理学的な現象(超能力)は抑制される(出てこない)ようだ」と言っているが、これもアダムスキーの説と全く同じである。

偉大なアダムスキー哲学

「人生は夢のようなものだ」と人間はよく言うけれども、それは人間が眠っているからだとアダムスキーは言っている。つまり一般の人間は、マインド(心)だけで生きていて、自分や万物を生かす根元的な英知あるパワーに目覚めていないというのである。自分の内部にすごい能力が秘められているのに、それに気づくことなく、有限の肉体と有限の知能だけで生きるのが人間だと思い込み、失敗するとすぐに「自分はだめだ」ときめつけてしまう。こうして人間は汎宇宙的なパワーに全く気づかないで人生をすごすのだが、これをアダムスキーは睡眠にたとえたのである。だから人生は全く無意味なもので、価値あるものは何一つなく、あっという間に七、八十年の生涯をすごし、結局何のために生きたのかわからないという茫漠たる観念だけが残り、人生が夢としか思えなくなるらしい。

考えると地球人の意識には常にベールがかぶさっていて、ある一定の範囲外には意識が拡張しないような状態にあるようだ。「一寸先は闇」ということわざがこれをよく表している。テレパシックな洞察力や透視力などはなく、まして未来の予知能力もない地球人は全く暗黒の世界に住んでいるようなものなのだろう。

私たちはすでに輝かしい光明を見い出している。アダムスキーが残してくれた大いなる遺産、すなわち彼の宇宙的体験記と深遠な哲学がそれだ。どのように見てもこれらの書物を読んでまじめに実践する人は普通人とは違う。なにかしら人格高潔で想念は宇宙的であり、視野が広くて寛大で包容的である。こうした結果を見てもアダムスキーが偉大な宇宙的人間であったことがわかるのだ。だれがどのようにアダムスキーを批判しようとも、このような素晴らしい人間が続々と育成されるという事実を否定することはできない。

GAPの会員諸氏は堂々と胸を張って前進されるとよい。実状が本質を物語っているからである。

なおテレパシーや透視能力を開発するにもミラクル・ワードやイメージ法を応用するとよいだろう。つまり自分がすでにそれらの超能力を開発し、それを存分に発揮して人を助けている姿をイメージとして描くのである。

ただし病気治癒を望む場合、医師の手による治療で治るものならその科学的な恩恵を受けるほうがよい。ここでは医師に見離された絶望的な患者の救済策として言及したのである。

日本GAP企画第5回「エルサレム宇宙考古学の旅」

イスラエルの旅の思い出(2)

エルサレムでUFOが出現

静岡市　野口敏治

日本を出発してから二十数時間後の八月十三日、憧れのエルサレムに到着し、ホテルのベランダからエルサレムの夜景を同室の橋口氏と眺めていた時、橋口氏が「流星だ」と独り言を言った。しばらくしてまた言った。その時、室のドアをノックして高梨氏が入ってきた。流星が再度出る訳がないということで、三人で屋上に行って、しばらく上空を眺めているとオレンジの光体が、かなり早いスピードで水平に走った。これは流星ではない。スペース・シップであろう。その後も数回上空に出現した。時間は九時二十分頃から十時三十分頃までであった。

静岡支部から参加している赤池氏、鈴木氏から話を聞くと、なんと彼らも十三日の夜、室のベランダから十時十五分から十二時三十分の間に上空に十回の光体を目撃したと興奮気味に話してくれた。上空の方々も『ようこそエルサレムに』と我等日本GAP会員を歓迎してくれたのであろうか。幸先の良いスタートであった。

十四日の夜は、静岡支部男性メンバー五名で屋上に行き、再度試みることにした。この日は各自が十分間づつ送念し、他の人はその間ただ見ているだけとしてやってみた。すると出現するまでの時間は各自によってまちまちであったが、五名全員の送念に答え出現してくれた。この日は八時四十五分から十一時まで行い、合計十二回の出現があった。

十五日も同様五名で屋上に行き九時から十一時三十分まで行い、合計十回の出現があった。

十六日の夜はイスラエルの民族舞踊と音楽を観賞し、楽しい一時を過ごし、ホテルに帰ってきたのが十二時近くであった。急いで着替えて五名で屋上に行き、二時近くまで観測を行った。この日は五回の出現があった。

エルサレム滞在の四日間連続して出現したことは予想もしなかった驚異的な出来事であった。

十九日、ローマに到着し、最後の夜ということで屋上に出たが立地条件が最悪で心を冷静に保つのに苦労をした。十一時から十二時までの間に二回の出現があった。

エルサレム、ローマと送念に確実に答えてくれ、目撃出来たことはメンバーにとってこれ以上の激励はないだろう。地上ではイエスの足跡を、超ベテランガイド榊原先生の解説で堪能し、地上と上空両方で興奮のしっぱなしの旅であった。

エルサレムの思い出

静岡県　橋口真市

八月十三日イスラエルのテルアビブ空港に到着する。外を見ていると聖書の世界がひらかれるような気がする。ホテルに到着してから、バルコニーから夜空をながめていると流星のような物が光る。八月十四日オリーブ山からのながめはすばらしくなんともいえないぐらい感動する。

夕食が終わってから静岡支部五人でエルサレムの夜空をホテルの屋上からながめる。宇宙ホタルが十二回ぐらいあちらこちらから光る。スペース・ブラザーズに感謝する。八月十五日エルサレム旧新市街見学中、モリア山の所にあるオマール・モスクを歩いている時上空をながめると白い物体が飛んでいく。かなり速い。オマール・モスクの説明をきく。それから持物を全部外においてクツをぬいでから中に入る。モザイクタイルとステンドグラスがとても美しい。アブラハムが息子イサクを神への犠牲に捧げようとしたところといわれる。

八月十六日エリコと死海見学。マサダの要塞をケーブルカーで昇り説明を聞く。上から死海やまわりの景色をながめる。すばらしい景色である。死海での海水浴はほんとうに楽しかった。ほんとうに沈まない。おしりがぽかんと浮く。宇宙遊泳をやっているような気がする。夜の九時の民族音楽のショーはとてもすばらしかった。各国の人が手をつないで和になって踊る姿を見ていたとき、すべての人がすべてをすてたとき平和な世界がひらけていくような気がした。各国の歌を一人の人が歌うのを聴いておどろいたり感激したりした。八月十七日ガリラヤ湖を船でわたる時、カペナウムに船がもう少しでつく時、上空を白い物体がゴラン高原のほうに飛んで行く。ガリラヤ湖畔の野外パーティーは大変楽しかった。田中さん、久保田先生ありがとうございました。

きわめて貴重な体験

愛媛県　伊藤達夫

この度の研修旅行では久保田先生をはじめ、田中さんや参加された皆様には大変お世話になりました。心から感謝致しております。一昨年の旅行でデザートセンターを訪れてオーソン氏とアダムスキー氏の劇的な再会の現場を視察させていただきました。今回イスラエルの地を訪れて、イエスとヨハネが二千年前にユダヤの荒野を舞台に繰り広げたスペース・プログラムの足跡をたどることができました。この体験でユダヤの荒野とデザートセンターがスペース・プログラムという一本の太い線で結ばれた意味は極めて大きなものがあり、深い感銘を覚えております。

金星人イエスが人々に説いた「愛」の教えはその後キリスト教と呼ぶ宗教に変化して今日に至っています。しかし私達は今や現代において、ブラザーズとアダムスキー氏の御尽力のおかげで、最も純粋な形で宇宙の法則を学ぶ機会を与えられているのです。即ちアダムスキー全集がそれであり、その中に科学時代に生きる私達がコズミックマンに至る道が述べられています。

かつてイエスの弟子達が師の教えを人々に伝えた活動がスペース・プログラム

の一環であるならば、現代においてGAP会員である私達にも同じ使命が与えられていると思います。スペース・ピープルや、アダムスキー氏が伝えて下さった宇宙哲学とブラザーズ問題を雑物が混じらない純粋なかたちで現代と次代を担う人々の為に正しく後世に残すことが、私達に与えられた役割であり、責務であると確信しています。

この旅行を終えた私の意識の中に「今後の自分の進む道はどうあるべきか、またどうあらねばならぬのか」という疑問に対する確かな回答が浮かび上がってきています。今回は本当に深遠な意味を含んだ格調高い研修旅行でした。この旅行で得た貴重な体験をこれからの活動と、向上の糧として励んでゆきたいと思います。

イスラエルの旅に参加して

山形県　清水　正

このたびの旅行はイエスの足跡をたずねるという事で、大範囲を徹底して回りました。移動距離が短く、又、そのつど聖書に記す所を紹介されましたので、あわただしかったのですが、これからの研究に大いに役立つことと思います。

イスラエルと言っても死海地方と北のガリラヤ地方ではその自然に違いを感じました。ガリラヤ方面に近づくにしたがってしだいに緑豊かになってきます。そのガリラヤ湖では野外パーティーが開催されて、日本民謡の流れる中、日本酒を一杯やったら、どこか日本の海岸という感じで、又、この場に五時間もゆっくり出来たことがなによりなことでした。とても素晴らしい時間であったと思います。

エルサレムの姿は過去二千年の間に教会が立ち並び、ずいぶん変わってしまい、その他の遺跡でも、エリコやカイザリヤなどにしても石はくずれ、土台がずいぶん高くなって、その上にまた石積みされていたりしていました。イエス時代の遺跡はくずれた石のずっと下になっていました。

しかし、イエスの遺跡は教会が大切に管理し、その場所にあるものは二千年前のものです。ガイドの榊原先生がイエスの足跡を野宿しながらハダで体得したように、私はわずかな知識とわずかな時間でしたがエルサレムの旅での体験は貴重なものでした。これから聖書を読むにつけ、またそれがコンタクトストーリーだということからして、その理解には重要な旅行でありました。

この旅行をまたしても大成功にみちびいていただきました田中さん、久保田先生、同行いただきました榊原先生、皆さん、どうもありがとうございました。

楽しかった野外パーティー

山形県　清水敏恵

旅行の後ひいたカゼも治り、こうして感想文を書くことができるようになりました。現地で撮った写真など見ながら、いろいろと道中の出来事など回想しています。今思えば旅行中は何かと目や耳の感覚器官に振り回され、落ち着いた状況判断や印象の感受などなかなかできなかったようです。それだけ特種な場所なのでしょう。またそれぞれの教会で受ける何かも微妙に違って感じられたように思えます。

どちらかと言うと荒漠とした土地の多い中でガリラヤ湖畔や山上の垂訓の教会からの眺め、世界最古と言われるエリコの街など緑々とした場所は特に印象的でした。ガリラヤ湖での野外パーティーはほんとうに楽しいものでした。日本民謡など流れて、誰かが「まるで熱海の海岸へ来てるみたいだ」と言われたのはとても愉快でした。その翌日からあの下痢が始まったのですが、私の場合は苦しくも何ともありませんで、かえって宿便がとれたようなスッキリとした感じがあります。ちょっと不思議な現象でした。

その他にもいろいろ楽しい思い出などありますが、何といってもこの土地に於けるスペース・プログラムの歴史的な展開とでも申しましょうか。それが肌で感じられたことはとても有意義なことだと思います。旅行中、『生命の科学』を読んでおられた方が何名かいらっしゃいましたが、ほんとうに熱心で素晴らしいなと感じました。私自身に良き影響を与えて下さったのでとても感謝しています。それから旅行中、久保田先生、田中さんにはいろいろお世話をいただきほんとうにありがとうございました。また同行されたGAPの方々にも感謝致します。

楽しかった民族音楽ショー

栃木県　橋本　明

八月十六日の夜、エルサレムで民族音楽ショーに行った。最初フォークダンスをやるから会場から出て下さいという。たまたま舞台のまん前に座っていたので、ためらいながらも舞台に上がることにした。千田さんも上がってきた。よその国の人の間に入り、民族音楽に合わせて踊った。とても楽しかった。舞台に上がってよかった。この後、さまざまな民族舞踊が披露され、めずらしく興味深かったので二十枚以上写真に収めた。

最後はヤッファ・ヤーコニという歌手の登場となった。この方はすごい方で、会場に来ていた人たちにどこの国から来たかをたずね、その国の歌を歌ってくれるのだった。ざっと十カ国ぐらいの人々が集まっていたようである。日本にも何度か来たことがあり、さくら、さくらとか金襴緞子（きんらんどんす）の……と日本語で歌ってくれた。

野本さんが舞台に上がり、マイクをかりて先生を日本のすばらしい歌手だとかなんとか言って紹介する一幕もあった。さっそく久保田先生が舞台に上がり、一言あいさつしてから、GAP応援歌を歌った。これは最高によかった。

あっという間に民族音楽のショーは終わってしまったが、またひとつ良き思い出が出来た。こういう楽しい旅行が出来るのも先生、田中さんはじめみんなのおかげだと思います。ありがとうございました。

UFO出現に感動

静岡県　赤池澄夫

エルサレム宇宙考古学の旅、ほんとうにすばらしい感動の連続でした。今度エ

ルサレム行きに変更と決まると、この時期を待っていたとばかりに旅行の申込みから参加の実現に至るのでした。今思えば旅行の実現はミラクル・ワードが働かなければ単に申込みしただけでは全く不可能になっていたかも知れません。参加の機会は偶然には開かないことを感じました。さて旅行出発当日は大変恵まれた良いお天気で、又私達のお見送りのために成田空港まで来ていただいた方々ありがとうございました。

エルサレムの多数の遺跡はどこも大きな印象が強くて二度も三度も訪れたく感じました。イエスの二千年前の当時の空気が漂う旅でした。エルサレムを見聞できた影響か偉大なるイエスと聖書に改めて関心をもつようになりました。ところでエルサレムが一層魅了させたことは旅行出発前の東京説明会でイランに円盤が着陸したということ。そして今度私達が訪問するイスラエルでは円盤が着陸して私達のために歓迎してくれるでしょうと話されたことでした。そして実際にエルサレムにおいて上空で活動する円盤の実在を感じさせたということです。

私達日本GAP旅行団はエルサレム市内のホーリーランドホテルに宿泊した。エルサレムの夜は静かで神秘的であった。そして野口氏と門下生四名はそれに引き寄せられるように当ホテルの屋上に登った。そして限りなく美しい夜空に対してスペース・ブラザーズに呼びかけた。するとそれに応えてくれたかのように流星のような発光体が出現、深く感謝して再び呼びかける。何と短時間に幾度も出現した。この最中にイスラエル空軍機が現れ、ホテルの上空を急旋回をしてあきらめて帰った。私達はこの地球製の飛行機の敏速さにも感心した。観測を終わってその夜の驚異的な事件は忘れない。エルサレムのすばらしい見学と夜の強烈な体験でした。最後に日本GAP会長久保田八郎先生、ワールドセブンの田中氏、そして静岡支部代表の野口氏、同行の会員の方々大変お世話になりました。

新しい感覚の旅エルサレム

神奈川県　井川博文

私にとってエルサレムの旅は、新しい感覚を得た重要な意義ある旅となったことを帰国後強く感じております。これもイエスが二千年前にこの地において、宇宙的フィーリングを刻み込んでいったためと思いました。

成田を夕刻立ち、星が瞬くころ流れ星をいくつか見ていると、星のように輝く飛行体が飛行機より高い高度で飛翔している。方向は飛行機とは逆向きであった。想念の強い影響を感じながらエルサレム着。初めての海外旅行のため、心が落ちつかず、視覚に振り回されている感じであった。翌朝、オリーブ山に登る。その風景のすばらしいこと、聖都エルサレムに「今自分がいるんだ」と実感した。

そしてイエスの足跡を自分の足でたどりました。そのほとんどが教会またはアラブ人の店でおおわれてしまい、印象が薄い様に思えた。しかし今考えて見ると違った。宇宙的なある種のフィーリングがあったのだ！　それは空間に刻まれてあったのか？

教会の中で一カ所不思議な印象を受けました。それはラザロ教会で、全員が墓穴の様な洞窟に入ってガイドさんの説明を聞いている時に、私の左側に白いガウンを着てる人がいる様に感じた。その人は微笑している。そちらの方向を見たら、彼はいなかった。ふと見ると岩には、特殊の様に思える刻印があった。イエスが蘇生させたラザロの〝残留意識放射線〟が放射されていたのでは？

死海では水浴して絶体に沈まないことを確認しました（水が重く感じました）。ガリラヤ湖では静かな落ち着いたフィーリングに浸り感動。パーティーに感動。美しさに感動。ローマのサンピエトロ寺院も最高に感動。久保田先生、田中さん、ガイドのサカキバラさん、参加された会員の方々に感謝します。

旅の雑感

静岡県　高梨和明・美幸

野口敏治氏。至福の山から見た銀色の飛行体。
赤池澄夫氏。あれは流星でしょうか？
それともあざやかな円盤でしょうか？
千田光明氏。次のGAP研修旅行は新婚旅行。
三浦公子氏。シャローム、イスラエル。
グラッチェ。
伊藤達夫氏。また円盤を目撃されましたね。
清水　正氏。ミラクル・ワードそしてミラクル・イメージで実現!!
清水敏恵氏。イスラエルへハネムーン。
いつまでも仲良く。
遠藤昭則氏。故郷へ帰った気分だったのではないでしょうか？
池谷由貴子氏。仲がいいですね。幸福ですね。
坂野美津子氏。知的な印象。熱心にメモをとっていらっしゃった先生。
鈴木芳美氏。一夜にして二十機以上の円盤を見られる人となりました。
白川裕基氏。秋田支部にこの人あり。ビッグな男。
橋本　明氏。オリーブ山では久しぶりにお話ができました。
清水　悟氏。ガリラヤの寝イスの座りごこちはいかがでしたか？
野本俊次氏。ヤッファ・ヤーコニと共演した数少ない日本人のひとり。
石川敏雄氏。ゲストハウスそばの野外パーティーは楽しい思い出となりました。
吉原逸人氏。サンダルをはいて、イスラエルを思い出す。
山城尚雄氏。マサダのレストランではセンスあるユーモア。
橋口眞市氏。オマル寺院で円盤目撃。エルサレムとローマでも。
磯目三鶴氏。ガリラヤは最高の気分だったので。
升田裕子氏。レオナルドダビンチ空港で買ったあでやかなドレスお似合いです。
井口みい子氏。死海にネッシーはいましたか。チャーミングな方。
河辺宏幸氏。良かったですね。イスラエル。
清水勝一氏。学校では生徒に人気のある先生。

井川博文氏。飛行機より円盤を目撃した素晴らしい旅でしたね。
小沢アユ子氏。最初から最後まで元気いっぱいでしたね。
岡本静江氏。一万メートル上空からの中東は美しかったですね。
品野友一氏。又、いつかGAPの旅行でお合い致しましょう。
小林由紀子氏。GAPの旅行、又、いっしょに行きましょう。ミスとして。
篠　芳史氏。聖地エルサレムへ行くべくして行った方。
今西行雄氏。地中海はきれいでしたね。
そして女の人も。
斉藤康美氏。8ミリ撮影、御苦労様でした。
（以下略）

●日本GAP企画

海外研修旅行

大宇宙に意識を拡張するためにはまず自分自身のホーム惑星をよく知らねばならぬ。そこで「ディスカヴァー地球」とばかりに日本GAPは下表のとおり過去五年間に連続五回の海外研修旅行を実施して、いずれも大成功裡に帰国した。延人員は二百十名に達し、古代の謎の遺跡視察を主体にして訪問国も延十六カ国に渡り、大いに国際的視野を広めた。今後も毎年実施するのでふるって参加されたい（今夏の旅行は39頁を参照）。
（ただし編者の出版屋時代にエジプト・ヨーロッパの旅とアメリカ・メキシコの旅を実施しているので、編者企画の海外団体旅行は通算七回になる）

日本GAP企画海外研修旅行

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
	アメリカ中米宇宙考古学の旅	アメリカ南米宇宙考古学の旅	アメリカ・メキシコカリブ海宇宙考古学の旅	エジプトヨーロッパ宇宙考古学の旅	エルサレム宇宙考古学の旅
期間	昭和54年8月10→22日	昭和55年8月14日→26日	56年8月15日→30日	57年8月15日→29日	58年8月12日→21日
人員	60名（男37・女23）	63名（男51・女12）	28名（男15・女13）	23名（男14・女9）	36名（男26・女10）
訪問国	アメリカ、メキシコ、グァテマラ	アメリカ、ペルー、ボリビア	アメリカ、メキシコ	エジプト、西ドイツ、ポルトガル、スペイン、フランス、イタリア	イスラエル、イタリア
目的	アメリカ、メキシコ、グァテマラの大都市訪問と、アダムスキー関係遺跡、及びメキシコ、グァテマラの古代マヤの遺跡見学、グァテマラのリキンで保養。	アメリカと南米2カ国の大都市訪問と、アダムスキー関係遺跡、ペルーとボリビアのインカの遺跡見学、サンタモニカで保養。	アメリカとメキシコの大都市訪問と、アダムスキー関係遺跡、メキシコのユカタン半島一帯の古代マヤの遺跡見学、世界的保養地カンクンで保養、ディズニーランド見学。	エジプトとヨーロッパ5カ国の大都市訪問。エジプトの古代の大遺跡群とポルトガルのファティマの大事件関係遺跡見学。	2カ国の大都市訪問。イスラエルのエルサレムを中心にイエス関係遺跡と同国内の新約と旧約関係の遺跡見学。イタリアのローマ市内の古代遺跡とサンピエトロ大寺院訪問。
主要見学地	ロサンジェルス市、パロマー山にバスで登山、アダムスキーの一族が暮らしたパロマー・ガーデンズ住居跡、山頂のパロマー天文台、ビスタ市のアダムスキー財団、日米合同夕食会に出席、1952年11月20日、アダムスキーが金星人オーソンと会見したデザートセンター砂漠の会見地跡、メキシコ市、テオティワカンの大ピラミッド、グァテマラ市、ティカールの古代マヤの遺跡、太平洋岸の保養地リキン、アンティグア市、再度ロサンジェルス市。（詳細な旅行記は本誌68号に掲載）	ロサンジェルス市、パロマー山にバスで登山、アダムスキーの一族が暮らしたパロマー・ガーデンズ住居跡、山頂のパロマー天文台、日米合同夕食会に出席、1952年11月20日のデザートセンターにおけるコンタクト地点、ペルーのリマ市（博物館その他）、クスコ市、サクサワマンの遺跡、マチュピチュの遺跡、再度クスコ市へ。アンデス高原列車でボリビアへ。ティティカカ湖を船で周遊。コパカバーナ、ラパス市、ティワナコの遺跡、パチャカマの遺跡、ナスカの地上絵をセスナ機で空中より観察後、リマ経由で再度ロサンジェルス市へ。サンタモニカ海岸で保養。（詳細な旅行記は本誌71号に掲載）	ロサンジェルス市、パロマー山にバスで登山、アダムスキーの一族が暮らしたパロマー・ガーデンズ住居跡、山頂のパロマー天文台、ビスタのアダムスキー財団、エスコンディドで夕食会、1952年11月20日のデザートセンターにおけるコンタクト地点、再度ロサンジェルスへ。グランドキャニオン、メキシコ市、テオティワカンの大遺跡、タスコ、クエルナバカ、パレンケの遺跡、メリダ市、ウシュマルの遺跡、チチェンイツァの遺跡、カンクン保養地、再度ロサンジェルス市へ。パサデナ、ディズニーランド。（詳細な旅行記は本誌75号に掲載）	エジプトのカイロ市、ギザの大ピラミッド群とスフィンクス、エジプト考古学博物館、メンフィスの廃墟、サッカラの階段状ピラミッド、ルクソールのカルナック神殿とルクソール神殿、王家の谷、ハトシェプスト女王葬祭殿、ツタンカーメン王墳墓、ラムセス6世、セティ1世の墳墓、西ドイツのフランクフルト市、ハイデルベルク城、船でライン河下り、再度フランクフルト市へ。ポルトガルのファティマの大聖堂と各遺跡、アル・ジュストレルの3人の牧童の生家等、ナザレ、リスボン市、スペインのマドリード市、トレド市、フランスのパリ市、イタリアのローマ市、バチカン市国のサンピエトロ大寺院と各遺跡。（詳細な旅行記は本誌79号に掲載）	エルサレム市、オリーブ山、エレオナ教会、昇天教会、ゲッセマネ庭園、シオン山、パプテスマのヨハネ教会、ホーリーランドホテルの古代エルサレム市街大模型、イスラエル博物館、最後の晩さんの部屋、シロアムの池、ベツレヘム、聖カタリナ教会、羊飼いの野の教会、鶏鳴教会、ベテスダの池、ビア・ドロローサ（嘆きの道）、聖墳墓教会、ゴルドンの丘と庭園、ベタニヤのラザロの墓、古代のマサダの要塞跡、死海のエンゲリ海岸で海水浴、クムラン洞窟とクムラン教団住居跡、ガリラヤ湖を船で周遊、カペナウムの聖ペテロの住居跡、山上の垂訓教会、カナ、ナザレ、カイザリア、テルアビブ市ヤッフォ、イタリア・ローマ市の各遺跡、バチカン市国のサンピエトロ大寺院。（詳細な旅行記は本誌83号に掲載）

1983年度 日本GAP総会

一九八三年度の日本GAP総会は予定どおり十月九日に都内皇居北の丸公園の科学技術館で盛大に開催された。今年はアダムスキー全集刊行記念とあって、総会の前日に全国支部代表者会が開かれ、総会の翌日は団体で都内観光と、三日間にわたって多彩な行事が繰り広げられて大成功裡に幕を閉じた。

■全国支部代表者会

●十月八日午後一後より五時まで。
●上野公園内の東京文化会館
●出席者　三十五名

83年度は最初の試みとして全国十五支部より代表・副代表の二名ずつが出席することを原則とし、都合により一名しか出席できなかった二、三の支部共に、全国の支部代表が一堂に会したことは壮観であり、日本GAP創立以来の行事として一段と光彩を添えるものであった。

午後一時より篠司会者により開会が宣せられて、久保田会長が約一時間にわたって講演。GAP活動の意義と各支部の結束強化を力説して出席者全員の意気はいやが上にも高揚した。

休憩の後、各支部代表が一人ずつ支部の活動状況について報告し、実状を明らかにして今後の対策の資料とした。

五時に閉会後、上野駅そばのすき焼の店『竹弥』にて全員夕食会を開催し、和気あいあいたる雰囲気のなかに親ぼくを深めて今後の強力な交流のきずなを結んだ。北は北海道、南は沖縄と日本全国にわたる支部の各代表のなかには、まだ他の代表の顔を知らぬという人もあったので、この日の代表者会は友情を打ち立てる意味で絶大な意義をもつものであった。時間が四時間では短かすぎたうらみもあったが、一応大成功に終わったことは喜ばしい。今後の全支部の連携と結束が期待される。

■83年度日本GAP総会

●十月九日
●北の丸公園　科学技術館大ホール
●出席者　二百五十名

今年も昨年と同じ会場で開催された。ひと頃にくらべると出席者数は減少気味だが、そのかわりに本当にヤル気のある人だけに絞られてきたので、雰囲気はきわめて高次元となって素晴らしい総会が展開した。お祭り気分はみじんもなく、何かを学び取って意識を宇宙的に拡張しようという気迫にみなぎっていた。詳細な内容については次に掲げる齋藤泰文氏（東京）の手記を読まれたい。お世話下さった役員の方々と全国より馳せ参じて出席された会員名位に深く感謝します。

†

今年も恒例の日本GAP総会が開かれた。

午前十時には司会の篠氏が開会を宣言し、万雷の拍手の中、静岡支部代表野口敏治氏による『スペース・プログラム最前線』の講演を最初に、今年度のしめくくりともいうべき総会が始まった。

野口氏は、日常の生活の中においても目標をもち、ひとつひとつ達成しながら進歩することの大切さ、そして絶対にあきらめずに仕事をやりぬくことの尊さを支部会員の例を挙げ、力説する。その努力は必ずやスペース・ブラザーズの注目するところとなり、自分にも周囲にも良い結果をもたらすという体験にもとづいた実践談は大いに勇気づけられた。氏の話の中で、脳波の話があったが、これから二十一世紀へむけても極めて重要な話題だと思う。

次の講演は久保田会長による『アダムスキー問題の真髄』。会長は最初の導入の部分で、肉体は精神のもちよう次第でどうにでもなるのであり、自分が変化してゆけば十年が百年にも感じられるようになり、それが昂じてついには〝永遠〟が一瞬とさほどちがわないことがワカッテクルという時間の本質に迫る面白い話をした。これはまた精神身体医学の発達と相俟って、身体がなぜ時間にかかわって変化を続けるのか？　存在とは何なのかを示唆する重要なポイントだと思う。

続いて久保田会長はアメリカのアポロ計画の内幕をあばいた『MOON GATE』の本を紹介した。月の引力は実際には地球のそれの六分の一などでなく、十分の七なのであり、一般に公開された宇宙飛行士たちの月面歩行の様子にしても、フワフワとしたように見えるのは、全くNASAの〝目かくし〟だったという事実を著者が科学的に綿密に分析した結果、アダムスキーの体験はすべて本当だった、なぜなら、アダムスキーがそういうことを書けるのは、実際に月へ行ったからで、でなければ書けないハズである。そのためこの本はアダムスキー哲学へのすばらしい援護射撃になるという興味深い話である。私は今年の夏、日本橋の高島屋で開催された〝NASA展〟でのフィルムを回想しながら、アダムスキーが一般に認められないのをはがゆく思った。

また、久保田会長は、今年の夏行われた『エルサレム宇宙考古学の旅』での体験から、イスラエルの歴史（ユダヤ人の歴史）が、一般の日本人に知らされている程度のものとはちがい、実はユダヤ人が謎の民族とされるのは、彼等はもともと別の惑星からやってきた民族であった？　アブラハム、ヨシュア、エリヤ、モーゼ、イエス、エゼキエル……とコンタクティーが多いのも、そこに理由があると述べて、新約と旧約の長大にして深遠なスペース・プログラムを示唆する重要な話をされた。私はイスラエルやアラブ問題に関し個人的に特に興味があるので、実際に旅行して肌でじかに感じて体験してくることの深い意味を感じる。

次のプログラムは、一瞬暗くなったステージがパッと明るくなり、アダムスキーが母船内で会ったイルムスとカルナを思い出させるような美人が二人突如出現し（柴田さんと小島原さん）、マスターがアダムスキーに伝達したように久保田会長に花束が贈呈された。スペース・プログラムの継続は困難であるがゆえに会長の業績ははかり知れなく尊い。

昼食休憩の後、映画の上映にうつる。はじめに『パワーズ・オブ・テン』。我々の最も身近な尺度である10から10^2、10^3、10^4……と10倍づつ拡大する視野が、はじめ都会の公園でくつろぐ男女一組のカップルをスタート起点に拡がってゆく。五分もたたぬうちに銀河系外までも到達し、今度は逆に縮小しながら地球へ戻り、ぐんぐん極微の世界へ入りこみ、ついに素粒子の世界にまで来てしまった。マクロの宇宙とミクロの宇宙、宇宙の活動のそれぞれの尺度での様子が我々の最も身近な10の倍数で表現されるのをほんの約10分間でかい

ま見ることが出来た。私はこれを見て現代の科学の最先端を知ると共に、時間というものの無意味さを感じた。時間はただ空間のひろがりを人間の感覚で納得するために仮に人間が決めた約束にすぎないのである。

次の映画は今世紀最大のスペクタクルとも言うべき『ベン・ハー』。昨年に引き続き、チャールトン・ヘストンの活躍で大いに溜飲を下げることが出来た。この映画は、イエスの誕生の地パレスチナと、ローマを舞台に、イエスを、イエスの姿を、そしてイエスの教えをユダ・ベン・ハーというユダヤ人の一若者の勇猛果敢な活躍を描きながら側面から表現するという人間愛あふれる作品である。中でも宿敵メッサラに勝つ大戦車競争のシーンでは完全に時間を忘れ、二千年前のエルサレムに居て、手に汗をにぎって観戦しているような錯覚を覚えた。特にこの戦いでは、一つものすごく感激したところがある。それは「ムチでたたきながら馬をあやつるのでなく笑いながら乗ってくれる人を探していた」という砂漠の一族長の言葉である。センスマインドを馬にたとえたら、マインドの正しい制御がついには勝利をものにするという宇宙哲学の法則が生きたドラマとして感動的に表現されている。私は、すべてマインドのコントロールとはここにあると思った。

総会が終了して次は東京駅精養軒へ会場を移動し、大夕食会がはじまった。全員記念撮影の後、各地方支部代表の紹介があり、パーティーへとうつる。秋田支部代表佐藤氏の民謡、東京本部の磯目氏のギター等々、会員諸氏の特技が続々と披露され、素晴らしい総会の気分を一層盛り上げた。このあと二次会、三次会へと足をのばした会員も相当の数にのぼったということである。

■東京都内観光

●十月十日
●参加者　三十二名

今回は初めての試みとして希望者だけによる都内観光ツアーを実施した。これは地方支部大会でも翌日は観光に案内されるので、それにならったわけである。バス一台で朝十時に一同の宿舎である水道橋のグリーンホテルを出発。神田、日本橋、銀座へと進行し、皇居前広場と銀座四丁目の三越前で全員下車してしばらく自由行動とする。バスの窓から眺めながら通り過ぎるだけでは面白くないので、こうして主要な場所を重点的に歩いて見ることによって東京を肌で感じてもらおうという作戦だが、これは良かった。パリほどに史跡はないけれども世界屈指の大都市東京の素顔を皆さんは充分に理解されたようであった。

そのあと浅草へ行き、仲見世通りの大混雑の中を歩いて浅草寺へおまいりし、付近の大食堂で昼食をとる。続いて国会議事堂前を通過して東京タワーへ時間をかけて全員で昇り、展望台から大東京をしばし望見。七～八名の人はエレベーターを使用しないで展望台から階段を歩いて下まで降りた。これは運動になってよい。

次に新宿へまわって新宿公園の裏の陸橋から眼前にそびえる超高層ビル群をバックに記念撮影を始める直前、上空に黒いUFOが出現したという騒ぎで、一同しばらく空を仰いで観測する。どうやら気球だったようだが、その後新宿の京王プラザビルの展望台に昇って降りた直後に、またも彼方にUFOが現れたという騒ぎが起こって、双眼鏡などで観測するのに、今度は気球ではなく、明らかに円盤型の物体がゆっくりと移動するのを何人かの人が目撃した。会長も見た。

続いて青山、六本木、赤坂あたりを通過して夕方浜松町駅に到着。ここで半数が下車して更に東京駅で数名が下車、最後に残った十名ばかりで上野駅近くの料理屋で夕食会を開き、尽きせぬ名残りを惜しみながら再会を約して別れたが、きわめて有意義な一日であった。

なお前日の総会の日の昼食時に数名の人が外でUFOを目撃し、閉会後、大久保千秋氏（東京）がお濠端を歩行中、UFOを目撃したと報告している。

（36頁を参照）

▼上から全国支部代表者会，講演中の野口敏治静岡支部代表（中左），久保田八郎日本GAP会長（中右），総会後の大夕食会。

沖縄支部大会へどうぞ

那覇市　石野創太

私は昨年の総会に出席して理系の人が多いのを知り、大変心強く思いました。83年中にも数多くの新しい科学的発見（別な太陽系、太陽の輪、etc）がなされ、地球の科学が他の惑星上の科学の方向へ向かいつつあるのだという実感を私たちにいだかせましたが、84年になればこの傾向がますます顕著になっていくことと思います。このような時に太陽系や惑星、UFOの推進原理、宇宙的な数学etcに関心を持っている人や研究している人が集まって話し合い、研究の交流、情報の交換を行うことは大変有意義なことだと思います。そこで、これらのことに興味を持つ皆様にぜひ沖縄支部大会へお越しいただき、直接お会いすることを望んでおります。もって地球の科学の発展や他の惑星上の科学の地球上での導入と確立に寄与しようではありませんか。

沖縄は待っている

那覇市　三重野　繁

日本GAP会員の皆さん、こんにちは。はじめまして。毎日お元気でお過ごしのことと思います。さて五月に第二回目の沖縄支部大会が開催されるにあたりまして、簡単ではありますが御挨拶申し上げたいと思います。

明るい陽光とエメラルド色に輝くサンゴ礁の海、一年中ハイビスカスをはじめとする花々の香りが絶えることのない、そしてまた、「東洋のガラパゴス」といわれるほど種々珍奇な動物達が生息する南国の島・沖縄。自然の魅力もさることながら、独立国であった琉球王国時代に育まれた風俗や文化にも非常に興味深いものがあります。多彩な祭りや制度・習慣、琉球舞踊を代表とする芸能、そして紅型をはじめとする種々の伝統工芸品など、目にするすべてが沖縄独特のものばかりです。

四十年前の第二次大戦では、日本で唯一の地上戦という悲惨な体験をした沖縄ですが、今はその悲しみを乗り越えて街々は活気に満ちています。

エメラルド色に輝くサンゴ礁の海と強烈な太陽を求めて多くの若者が足を運び、沖縄の夏を満喫して帰って行きます。

県都那覇市のメインストリート、「国際通り」は、黄色人、白人、黒人という具合に、様々な人種が往来し異国情緒にあふれています。会員の皆様がお越しになれば、日本の他の都市では味わえない気分を味わえることでしょう。

さて、大変興味深いことに、最近ここ沖縄ではUFO目撃事件が頻発しており、度々新聞紙上を賑わせています。数年前には宜野湾市で、民家近くのサトウキビ畑にUFOが着陸するという大事件も発生しています。沖縄がスペース・ブラザーズから注目されているのでしょうか。このような現状のもとに活動する新里さんをはじめとする私達日本GAP沖縄支部会員は、来たる五月に、久保田先生をはじめとする会員の皆様がお越しになり沖縄支部大会を開いて頂きますことは、私達にとって非常な喜びであります。

ぜひ本土から一人でも多くの会員の方が有意義な支部大会に参加され、そしてまた異国情緒あふれる沖縄を満喫して下さることを心から願っています。

GAPを一日も忘れない

徳島市　池本晴美

エルサレムのすばらしい写真を送って下さいましてほんとうに有難うございます。先生は写真の腕前もすばらしいですね。私は泣虫なのか、写真を見ていろいろとまた涙が出てきました。懐かしいというよりなんだか悲しくなってくるのです。行ったこともない所なのに、私の心の原点のような、一度この目でしっかりと見たい――そんな気持になります。

初めてアダムスキーの事を知ったときの驚きは今でも忘れません。しばらくは仕事も手につかなくなり、まるで異次元に住んでいるような気がしました。が幸いにも同じ会社の友人に話しましたら、その人も私の次にGAP会員になり、救われました。彼女は現在は鹿児島に住んでおられ、今も会員です。

先生とは一度大阪の月例会でお会いしたことがあります。メキシコ旅行のスライドを大阪支部で映写されたときです。それから私は徳島へ帰り、友人は鹿児島へと離ればなれになりましたが、一日もGAPのこと、アダムスキーのこと、ブラザーズのことを忘れたことはありませんでした。私の人生はこれによって支えられていたといっても過言ではありません。それはカルマではないかと思います。

徳島へ帰ったのも私の家族にアダムスキーのことを伝えたかったからでしたが、最近は特に母がとても興味を示します。姉や祖父も心の中では解っているのではないかと思います。特に母に初めてアダムスキーのことを話したとき、真昼なのに輝く光を見ました。きっとブラザーズが激励してくれたのではないかと思います。

今年の（五十八年の）夏頃からGAPPが結束してゆくような感じがしていました。先生の長年の努力が実を結んでゆくのではないかと思われます。私達を導いてくださるのは先生しかないと思います。他のUFOグループでは真の理解を得ることはできないような気がします。何か物足りないのです。

素晴らしかった総会

山梨県　清水　南

みのりの秋となりました。先生には大変お忙しい日々をお過ごしのことと思われますが、このたびのアダムスキー全集刊行、大変おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

先日の総会での先生のお話には大変勇気づけられました。『ムーンゲート』の邦訳を心待ちにしております。また野口様のお話もすばらしく、イスラエルでのUFO目撃には感服しました。また今年の映画は大変すばらしく、特に『ベンハー』はアダムスキー哲学と同じ思想でつらぬかれており、監督ワイラーは宇宙哲学の理解者であるようにも思われました。また総会全体の雰囲気も大変すばらしく、役員の方々の御苦労がしのばれました。特に柴田様と小島原様の衣装、スカウトシップ、照明等も印象的でした。また夕食会や二次会では各地からの友人と楽しく語り合い、有意義な時を過ごさせていただき感謝しております。

今夏より私も東京月例会の56年よりの録音テープを随時聞かせていただいておりますが、その中で先生のお話はよくわかり、また時々ハッとするようなお話が多々あります。それらの実例等を少しでも実生活での実践にとり入れようと努力しておりますが、なかなか実行できない実状です。先生の御苦労もよくわかりました。今後私も宇宙哲学の実践と献本運動等による啓蒙活動も行ってゆきたいと考えておりますので、よろしく御指導下さい。

総会の日に円盤を目撃

神奈川県　大久保千秋

十月九日の総会が終了して次の目的地である夕食会場の精養軒に向かったのですが、わざわざ遠回りしたのです。円盤を目撃するために――。正直いって自分だけだと思いますが、「なぜこんなに遠回りするのだろう」といぶかったのです。そう思っていたところ、斉藤泰文氏と奥さんの津多子さんが、「円盤が出るかなアと

期待して遠回りして来たのに！」とか色々円盤の話になったのです。それで「ああそうか！　それで遠回りして来たのか！」と思い、それから上空を見るようになり、歩きながら上空を見ていたら、雲の向こう側に二、三の発光体が現れたことを知りました。

その発光体を初めは「なんだろう」と思ったのです。そして「円盤だったらハッキリ（見えるように）現れて下さい」と念じたところ、急に、しかも雲のない見えやすいところに（ちょうど木と木の間の所に）見えるように現れて下さいましたので非常に嬉しくなりました。上空に向かって想念を発するということは初めてではないのですが、今まではむなしい結果になっていただけに本当に嬉しいです。プラザーズやシスターズたちに感謝の念が絶えません！　ですがまさか本当に現れて下さるとは夢にも思っていませんでしたので、七人の同行者たちには注意をうながすことはしなかったのです。非常に残念なことをしたと思っています。目撃時間は二、三秒です。場所は皇居前です。皇居前の広場のほぼ中央の所で目撃しました。色は白銀色でした。

エルサレムでの壮絶な体験

静岡県　鈴木芳美

今回のエルサレム宇宙考古学の旅に参加させていただき、本当にどうも有難うございました。

今回は静岡支部から私、赤池氏、橋口氏、高梨夫妻、野口氏の六名が参加して聖地エルサレムで壮絶な体験をして帰国しました。

予想外のできごとなので今だに私はあの夜のことを思い出しては、あの時だけ別な世界にいたのではないかという気さえします。あまりにも度肝を抜く経験なのであの夜空に輝く美しい光景が脳裏に焼き付いてしまいました。これは私にとっては貴重な体験となり本当に感謝感激です。

ローマからテルアビブまでの数時間、機内から上空の偉大な惑星からいらした方々にテレパシーで送信し続けました。

そして現在テルアビブに着くとすんなりと解けこんでいき、第一印象がとても心地好かった。

テレアビブから遂に聖地エルサレムに来た！　ホーリーランドホテル（イースト）に夕方着き、この夜が壮絶な体験の始まりでした。その夜十時十五分から同室の赤池氏とベランダから美しい夜空に向かって、スペース・ブラザーズの方々に呼びかけを始める。三十分程したら光体が夜空を横切りそれから頻繁に私たちの前にその美しい光体が現れた。あまりにもすごい光景であり、思い出しただけで全身が高揚感で満たされます。円盤目撃の達人といわれる赤池氏はブラザーズと一体化していたが、生まれて始めて見るものすごい光景に私のほうは取り乱していた。そうこうしているうちに一時間以上経過し時計を見ると十一時半になっていた。その時間帯ぐらいの時に一際強く輝く光体が二人が見ている左から右へ水平に飛んだ。この時は私は思わず奇声を発してしまった。「これが別な惑星で作られた宇宙船なのだ！」その夜午前十二時三十分までに十数回目撃したうちで最も輝きの強い光体でした。赤池氏の言葉を借りれば鮮かそのものであり、私はこの時始めてこの言葉の意味を身をもって体験しました。

翌十四日もまた信じられないような出来事が発生した。

夜九時頃から私、赤池氏、橋口氏、高梨氏、野口氏の五名でホテルの屋上で仰向けになり、美しい夜空に向かって呼びかけを始める。すると間もなく野口氏が順番に一人づつ呼びかけてみてはどうだろうかと提案し、全員の一致で早速実行した。一番バッターが私であり内心果たして私のようなものにでもプラザーズの方々は応えてくださるだろうかと思い、見ればなくてもともとであり、がっかりすることもないのであると、むしろ開き直って天空を凝視した。すると十分程で五人が見ている前に光体が現れた！　嬉しい！　私のようなものにでもプラザーズの方々は応えてくださったのである。次に赤池氏、橋口氏、高梨氏の順で呼びかけるとそのようにプラザーズの方々が応えてくださっているのである！　ラストバッターの静岡支部代表の野口敏治氏が呼びかけを始める。これからなにがおこるだろうかという期待が全員の頭の中にあり、一瞬の動きをも捉えようと全員天空を凝視する。「やった！」「すごい残像である！」変化のある動きとともに完全に脳裏に焼き付いてしまった光景である。時計を見ると九時五十分を指している。そして全員で感謝の想念を送る。「偉大な惑星からいらっしゃいました兄弟の方々、ありがとうございました」この素晴らしい旅を企画し、実施されました久保田先生、そしてワールドセブンの田中さんに心より感謝申し上げます。

●家族新聞を発行

大阪府吹田市青山台一丁目三番C七一―三〇一号の会員・木村典子さんはご家族一家でマンガによる新聞「コズミック・ファミリー」を発行。第4号は「宇宙の友だち」と題して子供向けのアダムスキー物語りを掲載。優秀。申込はご本人へ。

●おめでた

青森支部代表・中根豊氏はGAPメキシコ旅行が縁となって来たる三月二十日、広島市の会員近藤久美子さんとご結婚の予定。祝電は〒039―26青森県上北郡東北町字夫雑原五四一の同氏宛に。

第一回　福岡支部大会

●十一月二十日（日）
●福岡市民会館（福岡市）
●出席者　三十名

前々日は氷雨まじりの悪天候だったが、大会当日は目も覚めるような日本晴れとなった。第一回大会として幸先が良く、何かに祝福されているかのようだ。

司会は川上富喜氏。氏は川崎市の会員・内藤重雄氏と同級生とかで、六十歳ながら旺盛な好奇心と宇宙哲学に対する熱心さは支部の注目の的になっている。

まず会員体験講演として松山市出身の樋口美由紀さん（旧姓藤原）による「育児と宇宙哲学」が始まった。彼女は双生児の母親であるが、強烈なミラクルワードによって逆子を正常位に変え、安産されたという興味深い話は女性によい参考になったと思う。

続いて久保田会長の御講演が始まった。アメリカの「ムーンゲート」という素晴らしい書物の紹介があり、アダムスキー問題の真実性を再確認した。またイメージ法について詳細に説明されて、絶対的な確信が重要であることを力説された。その後一時間あまり質疑応答が続いたが、皆さんは実によく勉強されていると感心した。

夕方六時からは中華料理店で夕食会を開催して親ぼくを深め、翌日も快晴の中を七名で太宰府へ行ったり市内を散策した。参加された皆様に厚く御礼を申し上げます。

（島津紳一郎）

〈予告〉 59年度地方支部大会

	第5回 松山支部大会	第6回 静岡支部大会
日時	3月18日（日） 午後 1：00→5：30	4月29日（日・2日連休の初日） 午後 1：00→6：00
会場と交通	「ホテル・シャトーテル松山」9階会議室。 松山市三番町4丁目9－6 ☎（0899）46－2111 国鉄松山駅下車、駅前から道後温泉行市電に乗り、「市役所前」で下車、徒歩1分。	「大京にっかつニューライフホテル」2Fオリンピアホール 静岡県田方郡中伊豆町 ☎（05588）3－1212 東京駅より修善寺駅まで直通の踊り子号が便利。同3号 9：00 5号10：00／13号12：30／15号13：30、各東京発。修善寺まで2時間15分。修善寺駅からホテルまでは無料のマイクロバスを利用。タクシーなら約¥1,000
会費	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。グランドキャビネ判・送料共）	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。キャビネ判・送料共）
プログラム	司会　野島哲浩 1：00　支部代表挨拶（伊藤達夫） 1：05　講演「アダムスキー問題の真実性」（日本GAP会長・久保田八郎先生） 2：20　休憩・全員自己紹介・記念撮影 3：00　記録映画「エルサレム宇宙考古学の旅」 4：25　質疑 5：30　閉会	司会　高梨和明 1：00　支部代表挨拶（野口敏治） 1：10　講演「アダムスキー問題と宇宙哲学の実践」（日本GAP会長 久保田八郎先生） 2：20　休憩・記念撮影 2：35　記録映画「エルサレム宇宙考古学の旅」 3：45　休憩 4：00　全員自己紹介・質疑 6：00　閉会
夕食会	大会終了後 6：00から 8：00まで同ホテル10F「ゴールドの間」で希望者による夕食会を開催。（立食形式） 会費　¥4000	大会終了後 7：00より 9：00まで同ホテル内で、アダムスキー全集刊行完成を記念して祝賀パーティーを開催。 会費　¥5000
宿舎	「ホテルシャトーテル松山」をお世話します。 シングル1泊　¥4500 ツイン1泊　¥9000 （税サ込）	「大京にっかつニューライフホテル」をお世話します。山中の広大な敷地内にあるレジャー施設完備の豪華ホテル。 1室5名様で宿泊（内、ベッド2名分、タタミ3名分）。お1人様1泊¥4600（税サ込）
夕食会と宿舎の申込	夕食会、宿舎、市内観光の申込は、その旨をハガキに記して3月10日までに下記へお申込下さい。 〒794 愛媛県今治市黄金町1丁目4－4　伊藤達夫 ☎（0898）22－3060	夕食会と宿舎希望の方は、ハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して、4月23日までに下記へお申込下さい。 〒422 静岡市西島304－9、野口敏治 ☎（0542）86－7729
備考	大会翌日は希望者のみにて松山市郊外へドライブの予定。 **※3月は支部大会のため月例会は中止。**	大会翌日は希望者により伊豆半島を観光バスで周遊。帰りは新幹線三島駅までバスでお送りします。 **※5月の支部月例会は大会のため中止。**

第2回 沖縄支部大会と観光の旅

日本GAPは沖縄支部結成3周年を記念して同支部のご協力のもとに第2回沖縄訪問の旅を企画しました。一昨年5月第1回大会より満2年目、沖縄支部もたくましく生長して宇宙的フィーリングを高めながら皆様をお待ちしています。真紅のハイビスカスの咲き乱れる、UFO出現の本場であるこの南海の楽園行きに多数ご参加下さい。リラックスした愉快な旅が展開します。

期間　昭和59年5月3日(祭)、4日、5日(祭)、6日(日)の4日間。

費用　¥98,000　往復航空運賃、毎朝食付ホテル3泊費、観光バス代を含む。（新聞には6万円代の沖縄旅行の広告が出ていますが、冬場は航空運賃その他のコストが安く、5月連休や夏場とでは大差があります。参加人数次第では上記金額に若干の変動があります）

申込　4月20日までに下記へ申込金(内金)¥20,000を添えて、現住所・TEL番号・勤務先・TEL番号・氏名(フリガナ付)を記入し、現金書留でお申込下さい。飛行機予約の都合上、早目にお申込下さい。出発20日前までにキャンセルされた方には申込金を返却します。
〒150 東京都渋谷区東3-24-9（サンイーストビル2F）、ワールドセブントラベル株式会社田中正　☎(03)499-2461　夜間・休祭日のお問合せは田中自宅の(0462)63－0615へ。

日程

●**5月3日**(祭)　羽田空港を出発（時間未定なるも午前中の予定）。
那覇空港到着後ただちに貸切りバスで南部戦跡へ観光→ひめゆりの塔→摩文仁の丘→玉泉洞→受水走水→斉場御嶽→首里城跡→那覇市のホテル（全5時間30分）。
同夜宿泊は「国際プラザホテル」那覇市松尾1-4-10、☎(0988)62－4243・8481（場所は同市内の繁華街である国際通りのど真ん中）

●**5月4日**(金)　7：00 ホテル出発、中部観光（西海岸回り）→中城城跡→東南植物園→多幸山ハブ公園→万座毛→海中公園(昼食)→塩川→今帰仁城跡→伊豆見パイン園→茅打ちバンタ→エキスポ(海洋博)ビーチホテル。
同夜宿泊は「エキスポビーチホテル」名護市備瀬136、☎（09804）8－3250・3233

●**5月5日**(祭)10：00ホテル出発、観光をかねて東海岸回りで那覇へ向かい、12：00「国際プラザホテル」着。午後1：30より隣接の「ホテルニュー沖縄」10F会議室で支部大会開催。会費¥2000

プログラム　司会　下地優子
1：30　支部代表挨拶（新里義雄）
1：40　会員講演（講演者未定）
2：40　講演「アダムスキー問題と文明」（日本GAP会長　久保田八郎先生
3：30　休憩・全員記念撮影
4：00　質疑・意見発表
6：00　閉会

7：00　夕食会開催。会場は上原正吉民謡クラブ「宮古根(ナークニーと読む)」市内天久1131－11、☎(0988)68－9543 会費¥4000、夕食会を1時間半開催し、そのあと同会場で沖縄民族音楽を1時間鑑賞。

※予約の都合により昼間の支部大会と夕食会は全員参加とします。両方の合計会費を大会受付でお納め下さい。

●**5月6日**(日)　午前中自由行動またはオプショナル(希望者のみの)ツアー。午後那覇空港発（時間未定）。

※読みにくい地名＝摩文仁(マブニ)、受水走水（ウキンジュハインジュ）、中城(ナカグスク)、万座毛(マンザモウ)、今帰仁(ナキジン)、斉場御嶽(セエフアウタキ)。第1回のGAP沖縄旅行の詳細な旅行記が本誌78号に掲載されています。

※上記の他に今年度は次のような地方支部大会が企画されています。6月10日＝群馬支部大会(太田市)、6月24日＝仙台・山形合同支部大会(仙台市)、7月8日＝大阪支部大会(大阪市)、7月28日＝新潟支部大会(湯之谷温泉)、9月9日＝札幌・旭川合同支部大会(札幌市)　9月23日＝東京本部総会。11月24日＝神奈川支部大会（川崎市）
詳細は次号以降に順次掲載。

絶賛発売中！

全7巻完結迫る！

ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳　全7巻
徹底的全面改訳決定版

ジョージ・アダムスキーの体験は真実であった！ アメリカの科学ジャーナリスト、ウィリアム. L. ブライアン氏が著書「ムーンゲート」で米航空宇宙局が隠蔽した月面の驚異的事実を暴露して一躍アダムスキーは再浮上した。偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集こそは、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針である。UFO研究家、宇宙哲学探究者必携の名著。

第1巻 宇宙からの訪問者 ¥2500
第2巻 UFO問題の真相 ¥2500
第3巻 UFOとアダムスキー ¥2500
第4巻 宇宙哲学 ¥1300
第5巻 テレパシー開発法 ¥1800
第6巻 生命の科学 ¥1800
第7巻 アダムスキー論説集 ¥2500

※送料は各巻¥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

郵便振替または現金書留でご注文下さい。〈第7巻は約350頁になる予定につき、定価を¥2500に変更しました〉

☆1冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。
☆第1巻より第3巻まで一括注文＝特別セット価格　¥7000（送料共）
☆第4巻より第7巻まで一括注文＝特別セット価格　¥6500（送料共）
☆第1巻より第7巻まで一括注文＝全巻セット価格　¥13000（送料共）

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33　Tel. 03(267)6920　振替 東京4-2521

日本GAP企画第6回海外研修旅行

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

圧倒的な感動と歓喜の旅であった58年度の「エルサレム宇宙考古学の旅」の素晴らしさを再度満喫して頂くために、多数の方の要望にこたえて59年8月に第2次のイスラエル行きを企画しました。エルサレムを中心にイエス関係の遺跡を訪ねながら第1次の旅と大体同じコースをたどり、そのあとはスイスへ入国してルツェルン経由インターラーケンを経てさらに登山電車で美しいグリンデルヴァルト村へ登り、ここに宿泊して夢のようなスイスアルプスを望見します。帰途はルツェルンに宿泊しますので、スイス滞在は2泊3日となります。またオプション（希望者だけ）により登山電車で名峰ユングフラウにも登って大自然の美を観賞します。航空機はチューリッヒ経由のスイス航空ジャンボを利用。費用は¥498,000。（ただしユングフラウ登山は別途料金約¥10,000）。詳細は別紙案内書をごらん下さい。ハガキで下記へお申し込み下さればお送りします。

●案内書申込
ワールドセブントラベル株式会社　田中　正
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
Tel. (03)499-2461　夜間・休祭日は(0462)63-0615

❀❀❀❀ 日本ＧＡＰ全国月例研究会案内 ❀❀❀❀

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第１土曜日 午後２：00→６：30 ※３月までは6：00終了	上野公園内「東京文化会館」４階会議室。☎03―828―2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。	¥ 300	２：00→３：00会員による体験講演。 ３：00→４：30久保田会長の「宇宙からの訪問者」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。 ４：30→６：30自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎ 06―436―3478	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00	新潟駅前「青年の家」☎0252―44―6766 連絡先＝星富治夫　☎02579－２－5562	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
福岡支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	福岡市天神町５丁目１―23「福岡市民会館」３Ｆ　国際会議控室 連絡先＝島津紳二郎　☎092-672-6784	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第２日曜日 午後１：00→４：30	名古屋市中区古沢町７－１「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331―2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩５分。 連絡先＝林　国宣　☎ 0586―45―6468 武田充弘　☎ 052―622―7339	¥ 300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレパシー練習，座談会。
仙台支部	毎月第４日曜日 午後１：10→４：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222―95―0725	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第１日曜日 午後１：00→５：00	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩３分。☎ 0236―42―5181 連絡先＝清水　正　☎ 0238―21―5441	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第１日曜日 午後１：00→４：30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011―241―9171　連絡先＝伊藤重信　☎011―742―0192	¥ 500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開，テレパシー練習，座談会。
静岡支部	毎月第１日曜日 午後１：00→５：00 ※４月は支部大会のため月例会は中止。	プラザー静岡ビル８階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町９－１ 連絡先＝野口敏治　☎0542―86―7729	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00	旭川市６条通４丁目「勤労者福祉会館」２Ｆ小会議室　☎ 0166―26―1304 連絡先＝阿部　堯 ☎ 01658－２－1585	¥ 500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表，アダムスキー著「宇宙からの訪問者」「生命の科学」を持参。質疑応答，テレパシー練習，研究発表。
松山支部	毎月第４日曜日 午後１：00→５：00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。 ※３月は支部大会のため月例会は中止。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎ 0898―22―3060	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第２日曜日 午後２：00→６：00	群馬県太田市「太田市民会館」 第６会議室。連絡先＝久保寺信一 店＝☎0276―25―5985 自宅＝☎0276―45―3544	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2)　☎ 0177―34―0163 連絡先＝中根　豊　☎ 01756－３―3386	¥ 300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。
沖縄支部	毎月第３日曜日 午後１：00→６：00	〒901-22　宜野湾市野嵩1547　マキシアパート　新里方 連絡先＝新里義雄 ☎ 09889－３―3695	¥ 500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介座談会等。
秋田支部	毎月第２日曜日 午後１：00→５：00	秋田市八橋運動公園１－２「中央公民館」趣味の間。☎ 0188―24―5377 連絡先＝伊藤正治　☎ 0188―62―2831	¥ 200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00	神奈川県川崎市川崎区富士見２－５－２「川崎市立労働会館」第１研修室 ☎ 044―222―4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前 連絡先＝大崎孝典　☎ 0492―65―0389	¥ 400	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。
茨城支部	毎月第３日曜日 午後１：00→５：00 ※今年３月と８月は第４日曜日。	水戸市中央１丁目４番１号「水戸市民会館」２Ｆ　小会議室（203号室） ☎ 0292―24―7521 水戸駅より徒歩10分，同駅南口より徒歩５分。 連絡先＝清水勝一 ☎ 0292―73―1903	¥ 300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，座談会、研究発表等。

★本誌バックナンバー（旧号）★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.80 主要記事「ファティマの大UFO事件」久保田八郎／「美しき惑星の思い出」中川真理子／「GAPの意義・アダムスキーの著書」／「聖書とUFO(2)」G.アダムスキー／82年度日本GAP総会賛歌・講演録　その他。

No.81 主要記事「月はUFOの基地!?」久保田八郎／「私は異星人に守られている」岩崎敏夫／「美しき惑星の思い出(2)」中川真理子／「形而上学，心霊学，宗教」G.アダムスキー／「〈改訳〉テレパシー開発法」G.アダムスキー／その他。

No.82 主要記事「静岡に頻出するUFO」野口敏治／「沖縄に出現した宇宙人」新里義雄／「スペースプログラムへの協力と宇宙的成長」伊藤達夫／「転生とカルマ」久保田八郎／改訳「テレパシー開発法」(2) G.アダムスキー／その他。

No.83 主要記事「NASAは真相を隠していた！」ウィリアムL.ブライアン／「人体オーラと人間の発達度」遠藤昭則／「転生とカルマ(2)」久保田八郎／〈UFO目撃報告〉UFO CONTACT／「異星人イエスの大地へ」久保田八郎／その他。

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙からの訪問者」解説講義録音テープ

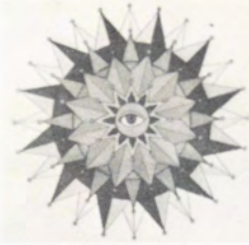
昭和58年12月より59年度中にかけて東京月例研究会で毎月１～２章ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的なものすごい体験の真実性と深遠な宇宙論を再認識する上で最重要な資料。久保田先生ご自身の驚くべき体験も洩らされることがあります。平易な説明と雄大な内容をぜひお聴き下さい。各支部必須のテープ。

テープ１本（90分）　￥1000　〒200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい（第１章より在庫）。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第２部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判）（カラー写真）

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。（サービス判）（カラー）

上記２点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本ＧＡＰ宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒120 ②￥200〒60一括注文の場合〒120

③テレパシー練習用ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。５種１組のカードを１箱に５組、計25枚収納。
美麗箱入り。
￥500 〒120

William. L. Brian 著「MOONGATE」

本誌に連載中の「ムーンゲート」の原書を取次頒布します。英語学習にも好適。希望者は定価$11.95を円相場に換算し、送料￥1,000をプラスして振替でご注文下さい。（注文時に$1.00＝￥240ならば、$11.95に￥240をかける）

日本GAP

会員募集

日本ＧＡＰはＵＦＯ研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のＵＦＯと宇宙哲学の研究大集団！
多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！
入会案内書をハガキで日本ＧＡＰへ申し込もう！

—日本ＧＡＰ—

編集後記

★本号は内容を純粋にＧＡＰ的なものとし、高密度に圧縮しました。したがって興味本位でなく教育的な記事が主体をなしており、いずれも一読の価値はあるものと自負します。

★ウィリアム・ブライアン氏の『ムーンゲート』は先号の第一回でまず10章と11章を掲載しましたが、本号からは最初に返って第１章より順次掲載します。月の引力が従来の六分の一よりも実際は強いというショッキングな新説は大きな波紋を越こすでしょう。この記事の真意は、ＮＡＳＡが軍部に牛耳られていかに真相を隠し続けてきたかを明確にすることにあります。ＮＡＳＡごとき高度な科学研究機関の発表や声明は一〇〇パーセント間違いないと思い込んでいる大衆に警醒の一石となれば幸いです。

★石川公一氏と伊藤達夫氏の手記も真摯な活動を行うＵＦＯと宇宙哲学の研究実践者の立派な記事であり、読者は感動されるものと思います。このような宇宙哲学を基盤にしたＵＦＯコンタクティーたちの集団が日本ＧＡＰなのであって、これを宗教的と評する人は甚だしい見当違いをしています。ＧＡＰはアダムスキーの宇宙論を主体にした、高度な宇宙的思惟法とモラルの追求や人間個々に内在する偉大な潜在能力の開発を目指しているのであって、何かの偶像や教祖またはカリスマ的人物を崇拝し寄りすがろうとしているのではありません。

★本号より『世界のミステリー』を読切連載します。短い記事ですが人間の運命の不可思議さについて考えさせられるでしょう。次号には一万メートル近い高空の飛行機から落下して助かった女性の実話を載せます。ご期待下さい。

★『驚異のイメージ法』も、読者がこの小文で飛躍的に人生の大転換を図ることは可能であると編者は信じます。超常現象的な何かに気付かれれば幸いです。

★アダムスキー全集も順調に刊行が続き、一月に第五巻『テレパシー開発法』、二月に第六巻『生命の科学』、三月に第七巻『アダムスキー論説集』が出て全巻完成します。特に哲学関係書は徹底的に改訳しましたからぜひお求め下さい（ＧＡＰでは取扱いません）。

★38頁の予告どおり今年度も各地方支部で盛大な大会が開催されますので、近い方はふるってご参加下さい。高次元の人々との交流は思わぬ向上の機運をもたらすことがあります。

★本誌の書店卸し協力者を求めています。本誌は株式会社のごとき営利事業でないために大手取次を通さず、約八十名の会員の方により都内と地方の書店に直接卸して委託販売されています。協力希望の方はハガキでお申し出下されば案内書をお送りします。

★**原稿募集**　本誌は読者から原稿を募集しています。ＵＦＯ目撃、宇宙的な不思議な体験（心霊的なものは不可）、宇宙哲学の実践、科学記事等の原稿をお寄せ下さい。四百字詰原稿用紙を使用、ペン書き（エンピツ、ボールペンは不可）、一行を十八字にしてタテ書きとし、十枚以上四十枚まで。匿名やペンネームは自由ですが必ず住所と本名を明記。

★昨年十二月より茨城支部が発足しました。代表は清水勝一氏。ご支援をお願いいたします。（K）

日本ＧＡＰ機関誌・季刊　春季号
UFO contactee 84号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本ＧＡＰ
〒133 東京都江戸川区本一色町365—818
TEL（03）651-0958
振替東京4-35912
一九八四年一月二十日発行
定価七〇〇円・送料２００円

¥700